
魔法少女リリカルなのは 好きに生きる者

ハチミツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 好きに生きる者

【Nコード】

N4060W

【作者名】

ハチミツ

【あらすじ】

ポケモンと東方が大好きな主人公森下恭介、しかし彼は交通事故で死んでしまった。

そして彼の前に神様が現れてチート能力を持たせて転生させてくれるというしかし転生先はリリカルなのはと東方がクロスした世界、しかし原作とは異なる世界だった、果たして彼（彼女）はどうなってしまうのだろうか？

この作品を読む前に（前書き）

この作品はリリカルなのはと東方をクロス及び二次創作です、この作品は不快な思いがする内容も含みます、それでも良いという方はこのままお進みください。

この作品を読む前に

ポケモンと東方が大好きな主人公森下恭介、しかし彼は交通事故で死んでしまった。

そして彼の前に神様が現れてチート能力を持たせて転生させてくれるというしかし転生先はリリカルなのはと東方がクロスした世界、しかし原作とは異なる世界だった、果たして彼（彼女）はどうなってしまうのだろうか？（スカーレットが終わってないのに投稿してしまった、でも思いついたからしょうがない、でも浮かんだアイデアは残したかったです）

プロローグ（前書き）

おもいきってやってみました

プロローグ

……ここはどこだろう？

俺の名前は森下恭介気がついたらここにいた、たしか俺は交通事故で

回想

確か俺は学校の帰りにウィークマン聞きながら

ドン！

車に跳ねられた俺はそのときまるで空を飛んでいる気分だった、そしてドシャ！っという音と体を打ち付ける衝撃と車の音が響いたとき俺の意識は闇へと向かっていた。

回想終了

そして気がついたときはここにいた

？「そのとおりです」

どこからか声が聞こえる

？「あなたは我々の不注意で死にました」

何を言っているのだろうか？

？「本当に申し訳ない、だから特別に転生させてあげます」

転生？

？「言い忘れた私は神だ」

神様かよ……転生か、どんなところだろうか？

神「聞いているだろうが、喋ることはできない一方的に私の話を聞く形になります」

はいはい、わかったから聞こうじゃないか。

神「聞いたとおり私達のせいであなただは死にました、そこであなたの好きな作品の能力を与えて転生させてあげます」

そーなのかー

神「えーと、調べたところあなたは東方とポケモンが好きと言ったのですが、よろしいですか？」

……うん

神「では、あなたに境界を操る能力とポケモンに技と秘伝と道具を使うことが出来ます、後はおまけとしてトランス能力をあげます」

お、すごいじゃん

神「そして転生先は東方とリリカルなのはの世界になります」

なぜリリカルの世界へ？ 東方ならわかるけど。

神「とりあえず行つてらっしゃい！」

oooooooooooooooooooo

そして光に包まれた俺は意識を失った。

神「言い忘れたけど、体は女の子だよ妖怪の、あその他の転生者に気をつけてね…… ってもう遅いか、まあなんとかなるでしょ」

恭介はいつたいていどうなってしまうのだろうか？

プロローグ2

???

ここはどこだろうか？

神に転生させられた俺は、どこかは知らないが街の路地にいるようだ、そして奥からかすかに聞こえる車の音と街の街灯の明かりがすこしだか自分の体を照らしていた、しかし問題はそれだけではなかった、今俺は身動きが取れない状態であり、そして

「おぎゃあああ」

赤ん坊になっていた

そう、今の俺は籠の中で白い布で包まれている状態だった

おいおい、転生って赤ちゃんからかよ、しかも捨て子設定なのか……

「おぎゃああああ」

冗談じゃないぜ、いきなりこんなところで終わるのかよ！

「おぎゃあああああああああ」

だれか、俺を拾ってくれと……！と訴えかけるように泣いた、しかしその声は闇の中へと空しく響くだけだった……っがそのときだった。

？「あら、こんなところに赤ちゃんが？」

俺は助かるのかとふと思った。

？「大丈夫、助かりますよ」

「おぎゃ？」

今自分が思っていたことをこの人は言った、その瞬間俺は抱っこされた。

そして抱っこされたまま路地から出ると、自分を抱っこしている人を見て自分は驚いたなぜなら、ピンクの髪に10歳くらいの少女、そして胸の所に目のアクセサリーが付いていた、そしてこの人の顔つき、どこかで見たことがあった、それは東方地霊殿に出でいる地霊殿の主である、あの古明地さとり。

しばらくして拾われた俺は、さとり似の女の子に抱っこされたままとある大きい屋敷の前にいた、そして少女は俺を抱っこしたまま屋敷へと入った。

《屋敷内》

？「お帰りなさいさとり様」

俺とさとり似の少女を出迎えた、女の子がいた、しかもその子も俺は知っていた、まず紅い髪で二本のおさげで、頭には猫の耳、格好はメイドだが、そしてスカートからはみ出す二本の尻尾、間違いのないこの子は。

さとり「ただいまお燐」

俺は確信したこの二人は本物であると、そして現実として存在している………つということは他のキャラも存在していることになる現実として。

ということとはここは幻想郷なのか……？ いや仮にそうだとしてもここまでくる途中高層ビルと住宅地を抜けてきた、幻想郷が近代化したのか、あるいは原作キャラが存在して幻想郷が存在しない世界なのか………だがそんなことを考えいるとき。

お燐「あれ、さとり様その赤ちゃんはどうしたのですか？」

さとり「拾ってきました？」

お燐「………今度は人間を飼うつもりですか？」

さとり「いえ、この子は私の子として育てることにしました」

お燐「まじですか？」

さとり「うん、マジ（笑）」

お燐「たはは、また私の仕事がふえた（――；）」

さとり「とりあえずこの子の服とオムツを買ってきてください、あと哺乳瓶とミルクも」

お燐「今からですか？」

さとり「コソビニくらいならある程度ならそろっているでしょう」

お燐「ところでその子の名前は？」

さとり「そういえばそうですね、まだ名前がありませんでしたね…」

…」

「おぎゃ
」

とりあえず変な名前は止めてほしい

お燐「あ、そのまえにこの子は女の子か男の子かみないと」

「おぎゃ
」

ちよつとまで、俺は男だぜ！

お燐「失礼」

「おぎゃ ああああ《やめてええええええええ》」

《しばらくおまちください》

お燐「女の子ですよさとり様」

さとり「そうですか」

もうお婿にいけない……って女の子だと！

さとり「整いました、この子の名前はヒカリ、古明地ヒカリです」

お燐「ヒカリちゃんか……いい名前じゃないですか、じゃあヒカリちゃん今日からよろしくね、お燐お姉さんだよ」

ヒカリ「おぎゃああ」

お燐「じゃあ、さとり様人走り行つてきますね」

そしてヒカリと名づけられた俺は、さとりの娘として生きていくことになった、でも女の子だったなんて、神様の意地悪……まあ男として生きてきた分女の子として生まれ変わるのとは悪くないと思った、好きな子風呂に入ったりできたりして……まあそれはそれとして、では古明地ヒカリ二度目の人生堪能します！

ブログ3（前書き）

投稿できました

プロローグ3

《屋敷》

さとり「ヒカリ、保育園に行く時間ですよ!」

ヒカリ「はい、今行きまーす!」

俺が……いや、私がここにきて4年の月日が流れた、私は4歳になり保育園に入園した、そしてこの4年で変わったことがあった、それは。

《3年前》

お燐「え、地霊殿を寮生にするんですか?」

さとり「ええ、これだけ広いのですから寮として開放したほうがいいと思いますよ」

お燐「しかし、大変ですよこの屋敷は私とさとり様の二人だけです、それにお金も掛かります、設備と改装に」

さとり「その問題はすでにクリアしています」

お燐「え?」

さとりは3枚の紙をお燐に渡す

お燐「こ、これは!」

さとり「拾った宝くじを持ち主に返したら、小切手をくれましてね」

《回想》

交番

おじさん「ありがとうございます」

さとり「いえ、当然のことしたまです」

おまわり「いや、えらいね」

おじさん「そうだ、これをあげよう」

さとり「なんですか？」

おじさん「小切手だよ、好きに使いなさい」

さとり「え、でも……」

おじさん「いいんだよ、おじさんはお金に困らないから」

さとり「……は、はあ」

《回想終了》

さとり「とまあ、こんなことが」

お隣「すごい強運ですね」

《現代》

とまあ、こんなことがあって今は寮という形になった、ママ（さとり）は半端ねえ、原作以上じゃねえ……？　とういうよりのこのママ（さとり）はとんでもない裏の顔があった、それは後に知ることになるだろう

ヒカリ「お待ちせママ」

さとり「それでは行きましょうか」

ヒカリ「はい」

《玄関》

お隣「あ、ヒカリちゃん、さとり様行つてらっしゃい」

ヒカリ「行つてきまーす！」

いつも元気に挨拶してくる、お隣姉さん、私を本当の妹みたいに可愛がってくれる、私のお姉さん……え？　お空とこいしはどうなっているかだつて？　それも後のお話で分かることです。

いい忘れましたが、今私が住んでいる所は海鳴市というところです、まさにリリカルの世界が混ざっています、あとママが言うにはこの地はなにかに呪われています、まあ、ある意味で呪われていますね、得にジュエルシード事件や闇の書事件などがこれから起こるのですから、あと自分に降りかかるその他の事件も起こるか。

だがしかしフラグを折る瞬間を私は味わった、それは地霊殿が寮になってから1年目のことだった。

《回想》

あれは私が2歳のころだった。

お燐「さとり様」

さとり「なんですかお燐」

お燐「新しい入居者が来ました」

ヒカリ「仲間は増えるんですね！」

さとり「そうですね、ではここに案内してくださいお燐」

お燐「はい」

お燐が一度部屋を出てすぐだった、そしてお燐に続いて入ってきた女性がいた、しかしその女性は。

？「アリシア・テストロッサです」

ヒカリ「な…なんだと」

私は驚いた原作だとこの人は死んでいるはずの人間だ……ということはまさか

さとり「おや、その子はお子さんですか？」

アリシアの後ろには2歳ぐらいの子供がいた、しかもアリシアと瓜二つ言っていていいほどに、そして確信したこの子は名前を。

アリシア「この子はフェイトです、私の娘ですほら挨拶しなさい」

恥ずかしそうに私達のまえに歩いてきた

フェイト「…こ…こんにちは、フェ…フェイト・テストロッサです…」

さとり「はい、こんにちは」

ほらね

さとり「私は古明地さとりです、この古明地寮の寮長です」

アリシア「え、あなたが、でもあなたは」

さとり「子供ですか？」

アリシア「は、はい」

さとり「私は病気で成長が10歳で止まっているのです、一応証明書はありますよ」

どこから取り出しのか、自分の証明書を突きつけている

アリシア「本物のようですね、わたしはてっきりこちらの赤髪の人がそうだと思っていました」

お燐「私は従者ですから」

すごいね、この世界はＥＦも混ざっているのだから、そんなときだった。

フェイト「あ、あの」

ヒカリ「ん、なに？」

フェイトが自分に話しかけてきた

フェイト「えーと、その……私とお友達になってほしい」

ヒカリ「いいですよ」

まあ断る理由もないし仲良くなるのも悪くない

フェイト「ありがとう」

こうしてフェイトと友達になった

《回想終了》

とまあ、こんなことがあり現在に至る

そして自分は成長するにすれ、あるキャラクターになっていく、ま
ず髪の色は水色に近い、そして髪は腰まで長くなった、両目は赤色、
そして顔がGAのヴァニラに似ていた……鏡で何度見てもヴァニラ
になっている、なんでさ？

とまあこんな具合かな

？「ヒカリ！」

ヒカリ「ん…あ、フェイトちゃん！」

フェイト「おはよう」

ヒカリ「おはよう」

今ではいい親友になった私とフェイト、そして

アリシア「さとりさん」

さとり「アリシアさん」

同時にアリシアとママはいいママ友になっていた

フェイト「一緒に行こう！」

ヒカリ「うん」

とまあ、こんな具合で話が進みそうですね

そして思ったこと、PT事件は起こらないことが発覚した、でもなんらかの世界の修正力でジュエルシードは来るかもしれない、そうなれば主人公の高町なのはも魔法少女になるかもしれない、あまり自信のない仮説だけど

どうなっちなかな？

設定

名前 古明地ヒカリ

性別 女

年齢 6歳

精神年齢 26歳

容姿 その名のとおりGAのヴァニラ・H 服装はピンク色服と青色のスカート

能力 トランス 境界を操る程度の能力 ポケモンの技秘伝道具がすべて使える ??? ? ??

種族 ポケットモンスター
妖怪

称号 ポケモンの証

トランスによる変身

ピカチュウモード 陸戦用でピカチュウの耳と尻尾と頬に電気袋がついた姿になる

リザードンモード 空中戦が得意になる、そして大きい翼と炎の尻尾が生えた姿になる

ギャラドスモード 水中戦が得意になる、下半身がギャラドスの尻

尾になる

好きな物

さとり お燐 フェイトなのは アリサ すずか

嫌いな物

家族を傷つける者 卑劣な人間

詳細 神に転生され赤ん坊にされた、だが偶然通り掛ったさとりにより拾われさとりの娘として生きることになった

名前 フェイト・テストロッサ

種族 人間

年齢 6歳

容姿 原作のアリシアと同じ姿 緑色の服とスカート 白いリボン
でツインテールにしている

デバイス もってない

好きなもの

ヒカリ アリシア さとり お燐なのは すずか アリサ 運動

嫌いもの

汚いことをする人間　Gが付くもの

詳細　原作とはちがいアリシアの子供として誕生する、2歳の時大人の事情で第97管理外世界へ移住することになる。

設定（後書き）

なんでアリシアが生きているかは後に話が進む内にわかります、たぶん想像が付く方もいらっしゃる方と思いますが、お楽しみください、あと????の部分も話が進むにつれその姿を表します、それでは次話でお会いしましょう。

第1話 ろくに特訓しなかったからこいつ痛めに遭う（前書き）

今回流血があります

第1話 ろくに特訓しなかったからこついつ痛めに遭う

ヒカリ 「ふん！」

ブン！

ヒカリです、今私は左手と右手をリーフブレードに変えて素振りをしています。なぜなら私はある出来事があって悔しい思いをしたからです。

それは私は5歳のときでした。

回想

保育園

フェイト「ヒカリ一緒に帰ろう」

ヒカリ「はい」

???「まって〜私も」

ヒカリ「なのはちゃん」

自分がなのはと呼んだ少女は高町なのはという少女、この保育園でなんか寂しそうにしていたところ私とフェイトが声をかけるが、最初はなにも言わなかったが次第になのはから声をかけてくるようになり、いろいろと悩みを聞いたりした。

なのはによるとお父さんが入院していて意識不明らしい、だから家族のみんなは忙しくなかなかなのはに構ってもらえないらしい、

それを聞いた私とフェイトはなのはに友達になろうよ……っと、彼女に言った。

でもなのはどこか戸惑ってしまい「ほんとに私でいいの？」と言ってきた、そして私とフェイトは「もちろん」と言った、そして泣き出してしまったなのはを抱きしめた私。

なのは「私も一緒にいい？」

フェイト「もちろんだよ、なのは」

ヒカリ「一緒に帰ろう」

なのは「うん」

なんとか笑うようになったがやっぱりどこか寂しいという感じがした、一応入院しているお父さんは目が覚めているがまだ入院しているためまだ忙しそうだった、だかこんな時だからこそ私がいるのではないと。

そこで私は保育園カバンの中に手を入れそこからある物を取り出した、それは。

ヒカリ「なのはちゃん」

なのは「なに、ヒカリちゃん？」

ヒカリ「これあげる」

私はなのはちゃんに取出した物を手に渡した

なのは「これなに？」

ヒカリ「元気になる薬ですよ」

なのは「元気に？」

フエイト「…なんかすごいね」

ヒカリ「なのはちゃんのお父さんに使ってあげてください」

なのは「こんなので本当に元気になるの？」

やっぱり疑っている、それがあたりまえのリアクションですしね、でも私はこれで治ると確信しているからです、なぜならこれが初めてではなかったからです、最初にこの力を使ったときはお隣姉さんが寮の屋上から転落するという事件が起きた、でも妖怪だったから死ななかった、でもしかし中傷くらいの怪我はした、そしてお隣姉さんはしばらく寝たきりになってしまい、ママがより忙しくなってしまった、そんなときだった。

私が始めてポケモンの力を使ったのは、そしてそのときに出したのが回復の薬だった、そして私はお隣姉さんの口を無理やりこじ開け回復の薬を流し込んだ……すると。

お隣「いよっしゃあああああ！元気ハツラツ…！？」

という勢いでバリバリに元気になりました傷もすべて癒えていた、でもそのあとママに問い詰められましたが

ヒカリ「やっただけでした」

さとり「……………」

そう言ったら黙り込んでしまいました。

とまあこんなことがあつて確信を得ています。

なのは「うーん……わかった、渡してみるよ」

フェイト「元気になるといいね」

ヒカリ「大丈夫ですよ、元気バリバリになりますよ」

そんな事を言つて話しているうちに何時の間にかなのはちゃんの家に行く道と私とフェイトが住んでいる寮へ行く道への角に来ていた、ここを左に曲がるとなのはちゃんの家へ、このまま真っ直ぐに行くと寮へと行く道になる。

なのは「じゃあね、ヒカリちゃん、フェイトちゃん！」

フェイト「うん」

ヒカリ「また明日」

なのはにさよならして、私とフェイトは寮へと帰った、そしてこの日から3日後のことだった。

古明地寮

ヒカリ「ママ、遊びに行つてきます」

さとり「どこへ行くのですか？」

ヒカリ「なのはちゃんの家へ」

さとり「そうですか、では気をつけて行ってらっしゃい」

ヒカリ「はい」

私はママに行き先を告げ、なのはちゃんの家へ向かった、そして15分くらい歩いただろうか、いつもの角を左に曲がり真っ直ぐに進んだ、そして歩いていく内に高町と書かれた表札を見つけた。

ヒカリ「なのはちゃん、遊びに来たよ」

私は大きい声でなのはちゃんを呼んだ、そして玄関の戸が開きなのはちゃんが出てきた

なのは「いらっしゃい、ヒカリちゃん入って」

ヒカリ「お邪魔します」

私は家の中へとお邪魔した。

リビング

なのは「フェイトちゃんは？」

ヒカリ「なにか準備があるって、いいましたから少し遅れると」

なのは「そうなんだ」

ヒカリ「そういえば、家の人は……？」

なのは「あ…うん、みんなお店のほうに」

無神経だったかな、すこし悲しい顔になってしまった、話題を変えないと。

ヒカリ「そういえばお父さんは元気になりました？」

なのは「うん、すごく元気になったよそして明日帰ってくるの！」

ヒカリ「そうですか、よかったですね」

なのは「ヒカリちゃんのおかげだよありがとう」

ヒカリ「いいですよ、お礼なんていりませんよただ私はなのはちゃんが笑ってくれていればそれでいいのです」

そんなときだった

バン！

なのは「今の音なんだろう？」

バンと音がした後、ドガドガと誰かが入ってくる足跡がした、そして黒いスーツを着た男達がやってきた。

男A「いたぞ！」

男B「捕まえろ！」

男C「へへへ、悪く思っなよ！」

なのは「なんなの！」

ヒカリ「なんなんですか！あなた達は」

とっさに私はなのはちゃんを庇い男達から守るように抱きしめた。

男C「なんだこのガキ、すっこんでいろ！」

男A「まあいい、こいつも連れていけ人質は多いほうがいい」

そして無理やり抱きかかえられ私となのはちゃんは連れて行かれてしまった、でもここで能力を使ってもよかったけど私はまだ攻撃をしたことがない、だからどんな結末になるか分からない、だから私は自分のせいではなのはちゃんまで巻き込んでしまうのではないかと恐怖を感じてしまった、だからチート能力をもらって強くなっていたと思うどこかで浮かれています全然力の制御とかの練習もしていなかったから、今になってこんなツケがまわってきてしまったのだろう……あまりにも情けなかった。

フェイトSide

フェイト「持っていくお菓子を選んでいたら遅くなっちゃった」

急いでなのはの家へと走って向かっていたフェイト、しかし急いでたどり着いた彼女の目にはとんでもない光景がまっていた。

フェイト「え、あれって？」

フェイトの目に映ったのは男達によって連れて行かれるヒカリとなのはの姿だった、啞然となっている間二人を乗せた車はすでに遠くに行っていた。

フェイト「ど、どうしよう……お母さんに知らせないと！」

半泣きになったフェイトは急いで寮へと戻っていった

???

ヒカリ「んー！」

なのは「うぐ！」

私となのはちゃんは男達の手によって口を布でふさがれ、両手と両足を縛られてしまった、そして男の一人がなのはの前にしゃがみこんだ。

男A「くくくく、お前のパパがいけないのだよ、私の邪魔をしたから」

なのは「んー？」

男の一人がなのはに向かってなにか話そうとしていた

男A「私達はある組織の生き残りなのだよ、ボスを失いわずか3人だけになってしまった、そうなってしまった理由は、そう君のパパである高町士郎によって壊滅させられたことだ！」

なるほど、ただの逆恨みで子供を人質に取ったというわけか

ヒカリ《なんとという卑劣な奴ですね、こういう奴が一番許せません》

私は男を睨み付けていました、男の一人がそれに気づいたしまった

男C「なんだこのガキ！」

やばい男を刺激してしまったそうです。

男C「こういうガキには躰が必要だ！」

ドガ

ヒカリ「ぐうっ！」

なのは《ヒカリちゃん！》

私は男に蹴りを入れられてしまった

ヒカリ「ぐうっ……」

しかし私はまた睨んでしまった。

男C「ちい、うぜえな」

そして男はどこからか鉄パイプを持ってきた。

男C「うらー！」

ドガ！

ヒカリ「うー！？」

男B「おい殺すなよ、大事な人質なんだ痛めつけるだけにしとけ」

男C「気にいらねえんだよ、このガキの目がよ」

ドガ！ どが！ バギ！

ヒカリ「……うげ」

どのくらい殴られたのだろうか、気がいたら自分の目に映るのは鉄パイプで殴りかかっている男だけ、なのはちゃんはどうなったのか……

なのは「……………」

どうやら気を失っているようですね、これなら

男C「なんだ？」

ヒカリ「うつうつうつ」

私は必死に力を込めて、自分が強くなるイメージをした、武器がほしい、力がほしい、どんな奴でも勝てる勝利がほしい、その想いが

ヒカリ「うがああああ!!!!」

私の体を変化させた

男A「な、なんだこいつは!」

男B「化け物!」

男C「ひええええ!」

今男達に見えるのは、服を突き破り巨大化していく幼女だった者がそこにいた、背中には巨大な竜のような翼と炎が灯った尻尾、そしてその姿はまるで竜そのものの姿に変わっていた。

ヒカリ「うがああああ!!!!」

男A「撃て撃て!?!」

男B「冗談じゃねえ、俺はにげるぜ!」

男C「お、俺もだ!」

男A「こら!逃げるな!?!」

男を一人残し、あとの二人はギャグ漫画の如く逃げ去ってしまった、そして残された男は

ヒカリ「うがああああ!!!!」

なくなる前に止めてくれてありがとう《

そして竜となったヒカリの体は元の幼女へと戻っていった。

なのは「ヒカリちゃん」

ヒカリ「ごめんなさい、なのはちゃんを悲しませることになってしまつて」

なのは「いいんだよ……ヒカリちゃん危ない！」

男A「しねえええ化け物！」

何時の間にか銃口をヒカリに向けていた

ドン！

一発の銃声が響いた

男A「ぐは！」

男が血を流しうつ伏せになり倒れた。

ヒカリ「いったい誰が」

コツン コツン

ヒカリ「誰ですか！」

なのは「ヒカリちゃん」

次第に足音が近づいてきた

？「大丈夫ですかヒカリ」

ヒカリ「え……？」

足音が近づいていくすれ、見知った顔が現れる

ヒカリ「ママ！」

???「なのは！」

なにかがヒカリの横を横切った

なのは「お兄ちゃん！」

男「よかった、無事で何よりだ」

ヒカリ「あははは、お兄さんですか」

さとり「それより大丈夫ですか、ヒカリ」

ヒカリ「はい、大丈夫です……！」

さとり「どうしました？」

ヒカリ「ママ、その手に持っているは」

ヒカリはさとりの手を見るとマグナム銃を握っていた、しかしもす

こし煙が出ていた。

ヒカリ「もしかして、撃ったのは」

さとり「私ですよ、可愛い娘に銃弾を浴びせようとしていたの
でいい」

ヒカリ「というかなんで銃なんか持っているのですか？」

さとり「ある漫画に影響されて、お隣に内緒で購入を」

原作以上に強いさとりにヒカリはただ啞然とするしかなかった、
そしてこれがさとりの裏の顔である

さとり「それに10年以上この仕事していますしね」

ヒカリ「ママは半端ないですね」

男「お取り込み中だがいいかい？」

さとり「はい」

男「ありがとう、ちゃんと依頼料は払う」

さとり「まいど」

なのは「ありがとうございます」

さとり「いえいえ仕事ですから、あとは私の私情も入っています
ので半額で5万でいいです」

男「すまない、それと君まで巻き込んでしまつてすまない」

なのは「でもヒカリちゃんごめんね」

ヒカリ「いいですよ、私はただなのはちゃんを守りたかっただけです」

でもお兄さんはまだ飯を返さないと気がすまなさそうですし。

さとり「とりあえず今日は解散しましょう、明日お宅に伺いますので」

男「そうですね」

一件落着かと思つたそのときだつた

ドン

なのは兄「な！」

また一発の銃弾が響いた

男A「せ…せめて、道連れに……」

さとり「大丈夫ですか！」

銃弾はなのはの兄の腕のそこをかすただけだつた、そのときだつた。

なのは「お兄ちゃん！」

なのは兄「ああ、大丈夫だ」

さとり「……………」

ヒカリ「ママ……ひい！」

ヒカリは見てしまったいつも笑っているさとりが、いままでヒカリが見たことないぐらい怖い顔になっていた。

男A「ちくしょう……」

さとり「死ね」

ドン

さとりの撃った銃弾が男の息の根を止めた。

さとり「帰りましょう」

ヒカリ「……はい」

なのは「お兄ちゃん」

なのは兄「これが裏の世界なんだ、なのは」

どこか悲しかった、いつものママじゃないけど本当に心配だったからここまで来てくれたんだなって、そしてあの男のせいで抑えていた怒りが爆発してしまったのかしれない、後味の悪い結果になって

しまった。

でもそれをぶち壊す出来事が今起こった。

なのは兄「ところでヒカリちゃんだっけ？」

ヒカリ「はい、そうですけど」

なのは「その、ヒカリちゃん……服は？」

ヒカリ「あ！」

さつき巨大化したときに服を全部破いてしまったのをすっかり忘れていた

ヒカリ「きゃあああああああ……！！！！！！」

さとり「あらあら、家に帰る前に服を買わないといけませんね」

そんなできごとがあり、あの悔しさを二度も起こさないようにと誓った

回想終了

そしてあの恥ずかしい出来ことから1年私は6歳になりもうすぐ小学校に入る前の準備をしなければならない時期になった、そして隠れて今は力の練習をしているあのときくらべてすこしはましになった、いちいち巨大化しなくても羽は生やすこともできる、そしてリーフ

ブレードとヒノコとそして無理をすれば、はかいこうせんも使えるようになった。

ヒカリ「もう裸になりたくないために力を使えるようにしないと」

それとあのあと帰ったらフェイトちゃんに泣かれてしまった、元々はフェイトちゃんの通報でママの耳に入り、ママがすごい勢いで飛び出したらしい、うれしかったです。

第1話 ろくに特訓しなかったからこついつ痛めに遭う（後書き）

オチはひどいと思いますが、今回はヒカリが大暴れするシーンを書きました、自分でやっというてこんなことを言つのもなんですか、さとりさん強いです

さとり「私を怒らせるとこわいですよ」

ハチミツ「ひiiiiiiiiiii!」

第2話 子供の行動に親はちゃんと見ている

古明地寮 古明地家

さとり「いいですかヒカリ？」

ヒカリ「はい」

読者の皆様こんにちは古明地ヒカリです、今私はママからお説教をされています。

なぜそうなっているかと言うと、ママはすべて知っていたからです1年前の裸事件の事や自分がこそこそ隠れて力の制御する練習をしていることも。

さとり「その力は決して人前では使ってははいけません」

ヒカリ「……はい」

さとり「しかし、不思議ですね」

ヒカリ「なにがですか？」

さとり「久しぶりに心を読んだからですよ、最後に読んだのはあなたが赤ちゃんの時でした」

そういえば心を読むことをすっかり忘れていた

ヒカリ「では私が転生者だってことも？」

さとり「知っていますよ、でもヒカリがどんな存在でもヒカリは私の大切な子供です」

自分が転生者と知られてもこの人は私の事を大切に思ってくれている、でも前の世界ではよく二次創作で転生者は自分勝手な行動を取り、ハーレムを作り洗脳など行いが、この先もし、他の転生者が現れたらどうしたらいいのだろうか？

でもすべての転生者が悪いわけではない一緒に戦ってくれる転生者もいるだろう、もし私の前に現れる転生者は味方が敵か分からないけど敵だったらスキマを使って生きたまま神のいる所へ叩き落します。

ヒカリ「ありがとう、ママ」

さとり「うふふ、それに境界を操る力ですか……」

すこし上の空になるさとり

ヒカリ「どうかしました？」

さとり「いえ、すこしいや事を思い出した物ですから」

ヒカリ「どんなことですか？」

頭を？にして聞き出そうとする

さとり「……幻想郷」

ヒカリ「え？」

さとり「ヒカリ、これから話す事は他言無用ですからね」

ヒカリ「…はい」

私はまじめにその話を聞くことにした。

さとり「今から30年前のことです、今いる外の世界から隔離された世界幻想郷、そこには人間、神、妖怪、妖精、天人と呼ばれる種族が住む世界ここまでは知っていますね？」

ヒカリ「はい」

さとり「あるとき一人の転生者が現れました」

ヒカリ「え、転生者ですか？」

さとり「そうです、そして転生者は不思議な力を使い私たち幻想郷の住民を絶望のどん底へと突き落としました、しかし幻想郷の賢者はただ黙って見てはいなかった」

ヒカリ「八雲紫のことですか？」

さとり「それだけではありません、幻想郷の巫女博麗霊夢、魔法使い霧雨魔理沙、守矢の現人神東風谷早苗、紅魔館のメイド十六夜咲夜、悪魔の妹フランドル・スカーレット、白玉楼の庭師魂魄妖夢、永遠亭の主蓬萊山輝夜が立ち上がりました」

ヒカリ「すごい」

さとり「しかし、このメンバーでも転生者を倒すことはできませんでした」

ヒカリ「それはどうしてですか？」

さとり「能力と力を無効化する力を持っていたからです、その力のせいで重症を負い意識不明にまで叩き潰されました」

ヒカリ「そのあとどうなったのですか？」

さとり「最後の手段として八雲紫の命をかけた攻撃によって転生者は死にました、そして代償として生命力を使い果たし八雲紫はこの世を去りました」

ヒカリ「亡くなった、八雲紫がですか！」

さとり「そうです、この出来事から数週間後幻想郷を覆っている結界が崩れ幻想郷は崩壊しました」

ヒカリ「……そんなことがあったのですか」

同じ転生者として私は悲しかった

さとり「だからと言ってヒカリは関係ありませんから、同じ転生者でもあの転生者とは違います」

ヒカリ「ママ」

さとり「……ふう、すこし喋りすぎましたね」

ヒカリ「そういえば幻想郷の人達はどうなったのですか？」

さとり「わかりません、私は気がついたらこの町にいましたから……ただ」

ヒカリ「ただ？」

さとり「もし生きているなら私と同じ状況だと思います、運よくお隣と再会できましたし」

ヒカリ「他の人も生きてるといいですね」

さとり「そう願いたいです」

やっぱり幻想郷は存在していた、しかし八雲紫が死んでいたなんてこの世界はこれから先どうなってしまうのか、それはわからない……

でも我儕を言うのなら私がこの世界を守ってみせる、どんな事があってもママ達も守ってみせるだから強くないと。

さとり「ところで話を戻しますが」

ヒカリ「はい」

さとり「……制御するために練習をするのは構いませんが、ほどほどに」

ヒカリ「はい」

力を使う事を禁止されるかと思いましたが、使っている所を人に見られるなという事だけだった、でもなのはちゃんにばれてますし、そういえばなのはちゃんあんな事があつたのに私を避けないでくれています、怖くないのかなと思う所がありますけど、気が向いたら聞いてみる事にします。

第3話 ひとの物を取ると痛めに遭う（前書き）

すこし遅れました

第3話 ひとの物を取ると痛めに遭う

【古明地寮ヒカリの部屋 ヒカリSide】

ママの過去を聞いてから4日たったある日私はある準備をしています、それは今日は小学校の入学式だからです、だから私は初の化粧をしている最中だからです……それはなぜそんなことをしているかと言うと、それは……

ヒカリ「女として生まれ変わったからには身だしなみをきちんとしないと」

しかし鏡で自分の顔をよく見るとその顔はまるでお化けとっていいほどのへたくそであった。

【ガチャ】

さとり「なにやっているのですかヒカリ！……ってなんですかその顔は！？」

ヒカリの顔を見ておどろくさとり

ヒカリ「お化粧を少々……」

さとり「……このおばか！」

【ゴチン！】

ヒカリ「痛いですよ……」

最近叱り方に容赦しなくなってきた、今はゲンコツ一発を落とされる年齢だからかママは私が間違った事をすると言教&ゲンコツの二択が飛んでくるようになってしまった、それは私のせいでもあるのですが……隠れて特訓、それと一度私がブチ切れて男言葉に戻ってしまったたうえ汚い言葉を言ってしまったのが原因の一つです（ママの目の前で）

さとり「まったく、顔を洗ってきなさい」

ヒカリ「はい」

ヒカリは洗面所へと向かった

さとり「しかも私の化粧道具……っと思ったらお隣のでした」

そして顔を洗い終わって戻ってきたヒカリにさとりが化粧してあげた。

さとり「簡単でいいですね」

ヒカリ「……今度は自分で出来るようにならないと」

さとり「それじゃあ、お隣が外で待っていますから行きましょう」

ヒカリ「はい」

準備が整い二人は玄関へと向かった。

【古明地寮 門前】

二人は門の前まで行くとお燐が車を準備して待っていた。

お燐「さとり様、車の準備は出来ていますよ」

さとり「ご苦労様お燐」

ヒカリ「車を何時の間に買ったのですか、お燐姉さん？」

お燐「まだまだ資金が余っているから奮発して買った……ちゃんと免許も取ったよ」

自慢げに免許証を見せびらかすお燐。

そんなに見せびらかさないでほしいけど、でもまあこれでいろんな所にいけますね

ヒカリ「そろそろ行きましょう……ん？」

？「ヒカリ！」

ヒカリ「あ、フェイトちゃん」

ヒカリ達の下にフェイトがやってくる、そしてフェイトに続いてアリシアも来た

アリシア「さとりさん、おはようございます」

さとり「おはようございます、アリシアさん今からですか？」

アリシア「はい、すこし寝坊をしてしまいして今から歩いていくと……遅刻ですね」

さとり「では、一緒にどうですか」

アリシア「いいのですか？」

さとり「構いませんから一緒に行きましょう」

お燐「まだ余裕がありますからどうぞ」

アリシア「ではお言葉に甘えて」

フェイト「車で行くの？」

アリシア「ええ」

ヒカリ「フェイトちゃん、さあどうぞ」

フェイト「ありがとう！」

全員車に乗り、お燐姉さんはエンジンをかけ私達を乗せた車は発進した……そして学校に着くまでフェイトちゃんと話をしたり、お燐姉さんが突然歌いだしたり目的地に着くまで楽しかった……ちなみにお燐姉さんは耳と尻尾は隠していますよ。

【小学校入口前】

さとり「着きましたね」

お燐を残して車から降りた私たちはさっそく中へと入った。

【校舎】

フェイトとヒカリ一旦さとり達と別れ校舎の中へ入り、そして他の
新入生達がいっぱい居て活気が溢れていた。

？「フェイトちゃん、ヒカリちゃん」

ヒカリとフェイトに手を振っているのがいた、二人はなのはの
下へ向かう」

ヒカリ「なのはちゃんおはよう」

フェイト「おはようなのは」

なのは「おはよう二人共、一緒の教室になるといいね」

ヒカリ「そうですね」

そして先生がやって来て「新入生は私についてきてください」と言
い私達は体育館へと案内される。

【体育館】

体育館へと案内された私達はそのまま待機している、そして「進入のみなさん入ってきてください」と新入生達を呼ぶ声が聞こえた「では前の子に続いて中へ入ってください」と先生が声をかけ、私は前に居る子に続いて中へと入った。

整列すると校長先生らしい人が舞台上上がり長い話が始まる、居眠りでもしてやろうかと思いましたが、ママが後ろの方で座っているのどつかつに寝たらあとで怖いことになりかねませんのでここは大人しく聞くことにした。

1時間後

校長『では、私の話はこの辺で終わりたいと思います』

やっと話が終わり他の先生の指示で私達は校舎の方へと戻った。

【校舎】

校舎に戻ってきた私はクラス表が書かれているボードの前に来ています

ヒカリ「……えーと私のクラスは……あつた…1年1組ですか」

フェイト「ヒカリと同じだ」

なのは「私も同じだよ!」

どうやら私達は一緒に教室になったようですね、そしてさっそく私達は教室へと向かった。

【教室1組】

3人は教室へと入った、そして黒板に其々が座る席が書かれていた。

そしてチャイムが鳴り私は指定された席へと座る（窓側の一番後ろ）しばらくして教室のドアが開き先生が入ってきた、長髪で髪の色は黒くて綺麗な髪でまるで姫様と思うほど美しい先生だった、なぜなら東方のキャラで姫様といえ一人しかいないじゃないですか、しかもその姫様と瓜二つの人が目の前にいます。

？「今日からみんなの担任になる」

先生は黒板に自分の苗字と名前を書いた

？「蓬萊山輝夜ほうらいざんかぐやです」

本人でした」

そして私は思った、姫様は二トのはずです……なぜ先生なんてやっているのですか……というかなんでここにいるのでしょうか。

輝夜「とりあえずよろしくね、みんな！」

新入生達「はい！」

輝夜「元気がいいわよ、それじゃあみんなの自己紹介から」

一人一人順番に立ち上がり自己紹介をしていく、そして。

輝夜「では、最後の子は」

ヒカリ「はい、古明地ヒカリです……好きなものは友達です、そして嫌いなものは卑劣な事する人です、えーと趣味は……PCです」

輝夜（PCですって……意気投合するかも！）

自己紹介は終わりしばらく先生の話があり、話が終わってそろそろ帰る時間になった。

輝夜「じゃあみんな明日からがんばろう！」

新入生達「はい！」

私達は帰り仕度をして教室を出た。

【廊下】

なのは「明日からがんばろうフェイトちゃん、ヒカリちゃん」

フェイト「うん」

ヒカリ「はい」

3人は帰ろうとしたときだった

?「返して!」

?「いいじゃないすこしぐらい」

なのは「なんなの?」

3人の目に映ったのは金髪の子が紫髪の子の白いカチューシャを取っていた。

ヒカリ「あれって……」

最初のイベントが始まりました、たしか金髪の子がアリサ・バニングで、紫髪の子が月村すずかでしたね。

なのは「……………」

フェイト「なのは?」

なのはの様子がおかしいと思ったフェイトは声をかけるが、すこし黙ったままだった……しかしそのときだった。

なのは「どうして」

「フェイト、え？」

その言葉を言っ
てなのは金髪の子に駆け寄った。

そして

バ
シ
ー
ン
！

なにかを叩く音が響いた、その音の元はなのはが金髪の子に平手打ちを喰らわせていた。

金髪子「う……」

なのは「痛い？でもね大切な物を取られた子の心はもっと痛いんだよ！」

金髪子「……つく！よくもやっただわね！？」

なのはと金髪の子とのと掴み合いがはじまった、すぐさま私とフェイトちゃん引き離そうとする、そしてそのときだった。

「やめてえええええ！」

なのは「え？」

金髮子「……………」

フェイト「あの子」

ヒカリ「やっとうですか」

さっきまでいじめられていた紫髪子なのはと金髪子の喧嘩を止める

紫髪子「もうやめて、喧嘩しないで」

なのは「……………」

金髪子「……ふん、こんなのいらないわ」

取った物を投げ返した、そしてそのあと金髪子はどこかへと歩いて行った。

ヒカリ「これが第一歩ですか」

そのあと紫髪子は「ありがとう」と言って付き添いの人と帰っていった、私達もママ達と一緒に家へと帰った。

【???】

？「私です、例の子を確認しました」

？「そうですか、引き続き監視をおねがいします」

？「わかりました」

突然現れたこの人物は何者なのか、それは後の話であきらかになる
う。

第3話 ひとの物を取ると痛めに遭う（後書き）

さとり「更新が遅れましたね」

ハチミツ「リアル事情です、すみませんその銃は収めてください」

さとり「誰でも遅れはあります、この辺で許しましょう」

ハチミツ「ありがたきお言葉」

輝夜「あとこの小説の私は引きこもりではありません」

第4話 誘拐で友情が芽生えるのですねB.Y.ヒカリ

？「なによあいつ！」

私こと金髪子改めアリサ・バニングスは非常に苛立っていた、なぜならほんのいたずらのつもりだったのに、そうしたら私の顔に平手打ちを喰らわせたあいつに苛立っていた。

アリサ「あーもうイライラする！あいつの家に行って文句を言つてやるわ！」

私は文句言いに家を無断で出た

【同時刻】

？「お礼を言わないと」

私は紫髪子こと月村すずかは出かける準備をしている、学校で私を助けてくれた子はお姉ちゃん、の恋人の妹でなのはちゃんって言っ子らしい、だから私はまだお礼を言っていなかった、ので今から行くことにした。

すずか「住所も覚えてたし」

私は家を出た

【アリサSide】

【通り】

アリサ「そういえばあいつの家を知らなかったわ」

なにも考えないで出てしまい困った顔になるアリサ

アリサ「……どうしよう」

このまま戻って調べるか、闇雲に歩いて探すか……と思ったときだった

アリサ「ん、あいつは」

そして私とこいつと目が合ってしまった

【少し戻る】

【すずかSide】

すずか「えーと……たしかこのあたりだったと思うけど」

私はお姉ちゃんに書いてもらった道順どおりに高町さんの家に向かっています、そして少し道が分からなくなってあたりを見回していた。

すずか「えーと……？」

そのまま道が分からなくなり立ち往生したときでした

すずか「とりあえず歩いてみよう……え、あの子は」

私はあの子と目が合ってしまった。

【合流】

アリサ「あら、あんた学校で私が虐めてた奴じゃない」

すずか「……………」

アリサ「だんまりなわけ？なんかいいなさいよ！」

すずか「ひい！」

すずかは持っていた紙を落としてしまった

アリサ「なにそれ？」

すかさずアリサはすずかの落とした紙を拾った

すずか「それ、返して！」

アリサ「なにになに……へえ、あんたあいつの家知っているんだ」

すずか「う」

これは良い物を手に入れたと思ったアリサ

アリサ「ふふふふ、これであいつに」

そのときだった

キキー！

アリサ「え、なに？」

すずか「ひゅい！」

突然黒い車が二人の前に止まった、そして中から黒服の男3人が出てきて、二人を取り押さえた。

アリサ「離しなさいよ！」

すずか「いやああああ！」

男A「ちい、さっさと行くぞ」

そして二人を乗せた車はそのまま発進した、しかしその光景を偶然見ていた人物がいた。

？「また誘拐ですか？」

【少し時間を遡る】

【ヒカリSide】

学校の入学式が終わり自宅に帰った私は散歩に出かけていた。

ヒカリ「学校での騒動はなんとか納まったからいいもの、このあと
どうなることやら」

そう呟きながらヒカリはただぶらりと歩く

そのときだった

？「離しなさいよ！」

？「いやああああ！」

なんと自分の目の前で金髪子アリサと紫髪子すずかが男達によって誘拐されていた、そして二人を乗せた車は発進した。

ヒカリ「また誘拐ですか？」

正直誘拐は勘弁してほしいと思った私だったが、見逃すわけにはいかないので追いかけることにした。

ヒカリ「その前に」

私は回りに誰も居ないかを確認したあと能力を使った【境界を操る力】を、そしてスキマを開き私はスキマの中に入った。

アリサSide

【????】

アリサ「なんなのよあんだ達は！」

すずか「お家に帰して……！」

男達に連れ去られた私達はどこかの倉庫だろうか、そこに私達は縛られた状態になっていた。

男A「黙ってる！」

すずか「ひい！」

アリサ「ふえ……」

男の大声でアリサとすずかは黙るしかなかった

男B「……おい、やめとけ、あまりガキを刺激するなよ」

男Bはなにかびくびくしながら男Aを宥めようしている。

男C「そうだぜ」

男A「おまえらなんでビクついているんだ？」

男C「そ、それは……なあ？」

男B「過去にトラウマが……」

男A「おまえらまさか子供が怖いのか？」

B & C「……ああ」

男A「この仕事を舐めているのか！」

B & C「ひえええ！」

男A「まったく前の仕事がクビになったからわざわざ雇ってやったんだぞ！」

B & C「すいやせん」

男A「それはそれとして、俺は今からこのガキの親に身代金を要求する電話するから見張ってろ」

男B「へい」

アリサ「ちょっとまってよ、身代金って！」

男A「おまえは金持ちの娘だろう、だからだよ」

アリサ「パパはそんなことでお金なんか出さないわよ！」

男A「なに？」

アリサ「仕事ばかりで私のことなんてどうでもいいのよ、そのおかげで私は捻くれ者になったけど」

男A「くくくく、いいたいことはそれだけか？」

そして男Aはどこかへ立ち去った。

アリサ「なによあの目は！」

すずか「……あの」

アリサ「なによ！」

すずか「……きつとあなたのお父さんは心配しているよ」

アリサ「はん！わかったような口を聞かないでよ、他人の癖に！」

すずか「……ごめんなさい」

しばらくして男Aは戻ってきた

アリサ「……どうだった、駄目だったでしょう？」

男A「すぐに用意をするさ」

アリサ「なんですって？」

男A「まあ、お前の父親も人の親だということだ、だが俺はやさしくはないぞ」

男Aはそう言ってアリサに近づく。

アリサ「なにするのよ」

男A「まあ、一応お前も女だ俺を楽しませろ」

アリサ「ちょっとなにするのよ！やめて!？」

男「俺はロリコンなんだ!」

男Aは本性を表しアリサに手を出そうとした……しかしそのときだった

【ガブ!】

男A「ぐああ!」

アリサ「…あ、あんた」

すずか「ふらへはい！（やらせない!）」

男Aの腕をすずかは噛み付いた

男A「はなせ!」

すずか「きゃああ！」

男Aはすずかを振り払い叩き付けた

男A「ちい、おまえからでもいいか」

男Aはすずかに目標を変えた、それを見ていた男二人は。

男C「なあ、兄貴」

男B「なんだ？」

男C「去年みたいにならないといいすんけど」

男B「怖いことを言うなよ！」

？「それは私のことですか？」

B & C「へ？」

男二人は後ろを振り向くと、そこには女の子がいたしかもその女の子は男二人にとってはやばい相手だったなぜなら。

B & C「ぎゃああああ！去年の化け物娘……！？」

男二人の悲鳴に男Aはこっちに気づいた。

男A「なんだ騒々しい……なんだガキか」

アリサ「あいつは」

すずか「高町さんと一緒に居た」

ヒカリ「お久しぶりですね、鉄パイプのおじさん」

男C「ひええええ！」

男B「勘弁してください！」

すぐさま男二人は土下座する

男A「おいおいどうしたこんなガキに土下座なんかしやがって！」

男B「いや、その……」

男C「このガキだけはやばいんだって！」

男A「不抜け共め！」

男Aはナイフを取り出した

男A「くくくく、しねええええ！」

B & C「ひえええええ！」

ナイフが男二人に振り落とされる時だった

【ガキン】

男A「なに！」

ヒカリ「勝手な男ですね」

私は鉄パイプでナイフを持った男の手に一撃を喰らわせた、その衝撃でナイフは遠くへと飛んだ。

男A「何時の間に鉄パイプなんかを」

ヒカリ「そこに落ちていたので」

男A「おのれえええええ！」

男は逆上してヒカリに襲いかかった

【こうそくいどう】

私はこうそくいどうを使い男の攻撃をかわした。

男A「どこへ！」

ヒカリ「こっちですよ」

男A「なに！」

男Aは振り向いた瞬間だった。

ヒカリ「メガトンパンチ！」

【ボガ！？】

男A「ぐげ！？」

男が振り向いた瞬間だった、ヒカリは男の顔面めがけてメガトンパンチを喰らわせる、そして男は壁に激突してそのまま動かなくなった。

ヒカリ「やりすぎでしたです……さて」

B & C「ひい」

ヒカリ「もう面倒くさいので」

【へびにらみ】

男B「か、体が」

男C「し、しびれて」

ヒカリ「一応通報はしましたし、あとは」

私はアリサとすずかの元へ向かった、そして縄をといた。

ヒカリ「大丈夫ですか？」

アリサ「あ、ありがとう」

すずか「ヒカリちゃんだよね、たしか」

ヒカリ「そうですよ、すずかちゃんにアリサちゃん」

アリサ「なんで私の名前を？」

ヒカリ「同じクラスじゃないですか」

すずか「そうだったね」

ヒカリ「まあ、こんな所は早くおさらばしましょう」

そして私達は全力で外に逃げた、そして。

【通り】

ヒカリ「ここまでくればもういいでしょう」

アリサ「はあ…はあ、あんたら足速いのね」

すずか「まだまだ余裕だよ」

ヒカリ「鍛えていますので」

アリサ「……それと、助けてくれてありがとうすずか、ヒカリ」

ヒカリ「いいですよ」

すずか「私は無我夢中だったし」

アリサ「あと、ごめんなさい」

すずか「今日のことは気にしてないよ」

アリサ「でも、すずかはなにも関係ないのに私は捻くれた上に八つ当たりして、そしてあなた大切な物を取り上げた！」

すずか「もういいんだよ、だってアリサちゃんは返してくれたし」

アリサ「……すずか、本当にごめんね！」

アリサはすずかに抱きしめられ思いつきり泣いた。

そして

すずか「もう大丈夫？」

アリサ「うん」

ヒカリ「それじゃあ、私はこの辺で」

すずか「待ってヒカリちゃん」

ヒカリ「なんですか？」

すずか「あの、お友達になってほしいの」

アリサ「私も」

ヒカリ「いいですよ」

すずか「えへへ」

アリサ「よろしく」

そしてそのあと私はなのはちゃんの家に行ったアリサちゃんとすずかちゃんをつれて、そして家に着くとなのはちゃんと会い、アリサちゃんはごめんねと謝った、なのはちゃんはこっちこそたいてごめんねと謝った、友達になった。

翌日の朝

【古明地家 リビング】

ヒカル「おはようママ」

さとり「おはようヒカリ、ちゃんと顔を洗ってきなさい」

ヒカリ「はい」

私は顔を洗いに行こうとしたとき、ふとテレビがついていたのです。こし見ていたら。

キャスター《ニュースです、昨日夕方頃誘拐事件が起きていたことがわかりました、人質になっていた子供は自力で脱出し、すでに家族の下に帰っており警察が犯人のアジトにたどり着くと犯人の二人は謎の痺れと一人は気絶しており、警察はこの男3人を逮捕し回復してから取り調べるということです……》

ヒカリ「悪は滅びる……っと、顔を洗わないと」

顔を洗った私は制服に着替る、そしてリビングへと戻った。

ヒカル「いただきます」

お隣「いただきます」

さとり「それでは食べましょう」

朝食を食べながら会話して、ママから注意される。

さとり「そうでしたヒカリ」

ヒカリ「なんですかママ？」

さとり「今日から学校です、そして通学はバスなのでバス停から通学バスになりなさい」

ヒカリ「はい」

そして朝食を食べ終え歯を磨き授業に必要な筆記用具教科書など鞆に入れた私は家出てフェイトちゃんと合流してバス停に向かった。

【バス停】

ヒカリ「ついたね」

フェイト「うん」

？「二人ともおはよう」

うしろからなのはが挨拶してやってきた

ヒカリ「なのはちゃんおはよう」

フェイト「おはようなのは」

元気よく挨拶を返した、そしてバスが到着して私たちはバスに乗った。

なのは「あ」

？「なのは、こっち」

バスに乗ると奥の席にアリサとすずかが手招きしていた。

ヒカル「すずかちゃん、アリサちゃん」

フェイト「あの二人って昨日の……」

ヒカル「これはね、フェイトちゃん」

【少女説明中】

フェイト「そうだったんだ」

アリサ「ちゃんと謝ったわ、私が悪かったのだから」

すずか「そしてお友達になったの」

フェイト「そんなことがあったんだ」

なのは「にゃはは」

ヒカリ「そういえばアリサちゃん、お父さんのことは？」

アリサ「和解したわよ、大変だったんだから」

【回想】

アリサパパ「うおーん！？もうパパはアリサをはなさない！」

アリサ「ちょっと、なんなのよ！」

アリサパパ「だってアリサが誘拐されたと電話があつた時はパパは死んだ思いをしたよ！」

アリサ「ふん、いまさらなによ」

アリサパパ「パパのせいでアリサには本当に苦労をかけた、そこで私は長期休暇を取った！」

アリサ「私のご機嫌取りなら結構よ」

アリサパパ「アリサを路頭に迷わせないために仕事に打ち込んでいただけなんだ、それがこの結果になってしまった、だからパパは心を入れ替えてアリサといっぱい遊ぶことにしたのだよ」

アリサ「……約束してよ、裏切ったら親子の縁を切るわ」

アリサパパ「わかった」

アリサ「パパー！」

【回想終了】

アリサ「とまあ、こんなことが」

ヒカリ「なんといいですか、よかったですね……」

すずか「あははは……」

なのは「まあ、とりえあえずよろしくね」

フェイト「がんばろうみんな」

そしてすずかちゃんとアリサちゃんと友達になった私たち、しかしこれから先私達にいろいろな試練と戦いが待っている、そして次は3年後のお話になります。

設定2

古明地寮

海鳴市のとあるはずれにある寮、元名は地霊殿、屋敷を綺麗にして其々の各部屋に生活に必要な設備を取り付けた。(クーラーもあるよ)

お風呂は共同である、理由は銭湯気分を堪能するため、男湯と女湯もある混浴もあるよ

1階は寮長の住居区と事務室と遊戯部屋

2階は入居区

3階も入居区

屋上 関係者以外立ち入り禁止

B1階は銭湯施設、サウナーとマッサージチェアがある 番台付(お隣のお気に入り席)

一部屋に4人は住める

家賃4万

設定2（後書き）

さとり 「やっと古明地寮の設定ですか」

ハチミツ 「遅れてすみません」

さとり 「まあいいです、それで次回は？」

ハチミツ 「いつきに3年後の話です」

さとり 「そうですか」

??? 「ふっふっふ、次は私が出るわよ」

さとり 「脇巫女！」

番外編 1 高い所から落ちると結構痛いよB Yお隣（前書き）

今回は番外編です

番外編1 高い所から落ちると結構痛いよByお燐

【古明地家 お燐の部屋】

お燐「ふわ〜よく寝た……」

何気ない日常中私こと火炎猫燐はいつも楽しく生活していました、私の日常は朝、まずはさとり様の作ってくれた朝食を食べる、そして食べ終わったたら歯を磨き顔を洗う、そのあと寮の庭を掃除して、さとり様達の衣服を洗濯するなどたくさん仕事があります、そしてそんなときでした。

【古明地寮 屋上】

洗濯が終わり私は屋上に上がると洗濯物を乾かす為に竿を立てた

お燐「今日はいいい天気だね」

そんな事を言いながらお燐は洗濯物を干した。

そして次々と洗濯物を干していく私は段々眠くなってきた。

お燐「猫は天気がいいと……ねむ……く……zzzzzz」

私は睡魔に襲われそのまま寝てしまった。

しばらくした時でした。

さとり「お燐、洗濯を干すのにいつまでかかって……お燐」

いつまでも降りてこないお燐を心配してさとりはお燐の様子を見に来た、そしてお燐がサボって寝ている姿をみたさとりは。

さとり「お燐!？」

お燐「ひゃい!」

さとりの大声で飛び起きるお燐

お燐「さ、さとり様!」

さとり「まったく寝てないでさっさと洗濯を終わらせなさい!」

お燐「はい!」

その時だった

お燐「おわつとつと!？」

慌てたお燐すぐさま洗濯を干すのを再開したときだった、慌てたお燐は蹴躓いて転びそうになり歌舞伎みたいな動きになってしまいお燐は勢いがついて止まらなくなりそのまま。

お燐「ひえええええ!？」

屋上から落ちてしまった。

【デーン！？】

さとり「おりーん！？」

そのあと私は受身が取れず中傷の怪我を負い寝たきりになってしまった、しかし妖怪でよかった人間だったら死んでいたね、うん。

そして私はヒカリちゃんが無理やり飲まされた薬によって全回復した、でもヒカリちゃんはどうかやってあの薬を出したんだろう……そんな事があり私の転落事件のお話でした。

番外編2　ちゃんと女の子らしく教育しないとB Yさとり

私にとって前代未聞な事件が起きました、それはヒカリを拾って5年目のことでした、私は遊びに出たヒカリを迎えに行って公園にたどり着いたときでした。

ヒカリ「やめてください！」

公園の中からヒカリの声が聞こえてきました、しかしただ事ではない事態が起こっているか私はすぐさま公園の中に入った、すると。

？「ここは僕達の場所なんだ、出ていけよ！」

急いで公園の中に入った私に飛び込んだ光景はヒカリがフェイトちゃんとなのはちゃんを庇っており、そしてその前を男の子3人がヒカリ達を囲っていた

さとり「子供同士の喧嘩ですか」

まあ、子供の喧嘩に大人がシャシャリ出るのはヤボということなのでこっそり隠れて見ることにした。

【ヒカリSide】

いつものようにフェイトちゃんとなのはちゃんと遊んでいた時でした、いきなり男の子3人が私達を囲い邪魔をしてきました。

フェイト「なんなの」

いきなりの事でなのはとフェイトは戸惑っていたが、ヒカリだけは冷静でいた。

男の子A「へへへへ、誰に断ってここで遊んでいるんだ？」

なのは「誰につて、ここはみんなの場所なんだよ！」

男の子B「うるさい！」

【ばしん！】

なのは「痛い！」

男の子の一人がなのはを叩いた

ヒカリ「やめてください！」

私はなのはちゃんとフェイトちゃんを庇う

男の子C「ここは僕達の場所なんだ、出て行けよ！」

ヒカリ「ここはあなた達の場所じゃない、ここはみんなの公園ですよ！」

男の子A「そんなの関係ないね、それとも痛めに遭いたい？」

このタイプは暴力で屈服させる奴だと私は思った、そして私は

【ばしん！】

男の子A「ぐえ！」

ビンタを喰らわせてやった

男の子A「……うわーん、ママにも打たれた事も無いのに！」

すぐさま思った、弱いくせにでかい態度を取るなど。

男の子B「このやろー!？」

ヒカリ「……っ！」

いつのまにか男の子の一人は武器らしき玩具を持っていた、いきなりだったので脳天を直撃してしまいヒカリはうずくまってしまった。

ヒカリ「っっ！」

男の子B「どうだ！ばーか!？」

そのときだった

【ブチ】

私の中のなにかが切れてしまった

なのは「大丈夫ヒカリちゃん！」

フェイト「ヒカリ！」

ヒカリ「……はずかしい／＼／＼／＼／＼／」

なのは「でも、ヒカリちゃんかつこよかった」

フェイト「うん」

ヒカリ「そうですか」

思わず顔を真っ赤にしたまま私はママとフェイトちゃんと一緒に帰りました。

【古明地家 さとりの部屋】

さとり「とりあえず今日思ったこと」

ヒカリを女の子らしく厳しく育てることにしました、そして私が厳しくなった最大の理由です、さらにこれがヒカリが男言葉を使った真相です。

第5話 もうすぐ始まる大異変なのかな？B Y輝夜

ここはどこだろう？

私はあの時幻想郷で……

いや、とりあえず目を開けよう

体を起こそう

そして私は

？「知らない天井」

私は

博麗霊夢は目覚めた。

【????】

霊夢「……ここはどこかしら？」

私は体を起こすと鼻をツーン……とした臭いがした、そして周りを見回すと何処かの部屋で間違いないはず、そして沢山のベッドと

そこで寝ている40代くらいの女性と髪型は変わっていたが白玉楼の庭師が眠っていた……そして。

霊夢「魔理沙なの？」

隣には金髪で40代くらいの女性も眠っていた。

霊夢「いつたいここは？」

？「あら、やっと目覚めたのね霊夢」

霊夢「あんたは」

私の前に女性がやってきたそいつは私の顔見知りだった、頭には赤十字マークがついた帽子び、上は左右が赤と青の服。そして下は青と赤のロングスカートで白衣を羽織っていた。

霊夢「永淋？」

永淋「33年ぶりね霊夢」

私の前に現れたのは永遠亭と呼ばれる屋敷の薬剤師で月の頭脳と呼ばれた女性八意永淋^{やじころえいりん}だった。

霊夢「……そうだここはどこなの？」

永淋「ここは外の世界で私が経営している病院よ」

霊夢「病院？ 外の世界……っ！ 幻想郷は！？」

それを聞いた永淋は重たい口調で答えた

永淋「残念だけど幻想郷は滅んだわ……」

霊夢「…そ…そんな……」

私は絶望した、なにが博麗の巫女だと幻想郷を守れなければ意味がないと。

永淋「あなたが悪いわけじゃない、あなたは十分強かったわ……しかし相手が悪かっただけ。」

霊夢「……気休めにもならないじゃない」

永淋「どんな言葉を言っても無意味にしかない、でもここからは霊夢次第で変わる」

霊夢「私次第？」

永淋「そうよ……っで、あなたはどうしたいのかしら？」

霊夢「私は……」

永淋の言葉で私はまずどうしたいか悩んだ、でもすぐには答えは出ない」

永淋「時間は十分にあるわ、そして答えを見つけないさい」

そう言って永淋は部屋を出て行った。

霊夢「私は……どうしたいのだろう？」

考えている内に1日が過ぎてしまった。

【翌日】

朝になり私は目を覚ます、だが現実が変わるわけでもない

？「霊夢、朝食よ」

私を呼び捨てにしていきなり部屋に入ってきて台車を押した看護婦さん、そしてその看護婦さんはウサ耳を付けた長髪の少女だった。

霊夢「あんたも生きたんだ、うどん」

？「うどん言うな！ 鈴仙よ！」

霊夢「そうだったわね」

私がうどんと呼んだ少女は鈴仙・優曇華院・れいせんうどんげいんいなば因幡彼女は狂気を操り
永遠亭の月兔。

鈴仙「まったくあなたは33年たっても変わらないわね、変わったのはおばさんになったことかしら」

霊夢「え？」

自分がおばさんと言われなにがなんだか分からなかった

鈴仙「いつまで15歳でいるつもりかしら」

そう言つて鈴仙は鏡を持つてきて霊夢を写した

霊夢「なによこれは!？」

そこに写っていたのは顔にしわができ骨と皮だけと40代くらいの女性が写っていた。

霊夢「こ…これが私なの？」

鈴仙「栄養点滴でよくここまで生きてたわね、本当に人間かしら？」

そう言われると自分は人間なんだろうかと思つた霊夢。

鈴仙「とりあえずゴハンをもつてきたから……あれ？」

鈴仙は頭を？にして自分が持つてきた台車をみた、そこに朝食を乗せていたのになくなっていた。

鈴仙「ない、朝食がない!」

いったいどこへ思つた鈴仙だったがガツガツと食う音がした、そして音がしたほうへ振り向くと・

霊夢「ぷはゝおかわりある?」

鈴仙「……手が早いわね」

霊夢「おかわり!」

鈴仙「うちは定食屋じゃないのよ!」

霊夢「夢想封印すつぞ!」

鈴仙「……………」

忘れていた霊夢はこういう奴だっことを

鈴仙「しかたがないわね……………はあ」

【1時間後】

鈴仙「……………」

私の目に映った光景は散乱した食器と皮と骨だった霊夢の体は一般女性と同じ体系に戻っていた。

鈴仙「これ誰が片付けられているのよ!」

霊夢「あんたよ」

鈴仙「……………くそ」

鈴仙はしぶしぶと片付けるのであった

【しばらくして】

霊夢「所でさ」

鈴仙「なによ」

霊夢「ここはあんたと永淋だけなの？」

鈴仙「いや、私と師匠とてゐ、後は因幡達ね」

霊夢「ここは外の世界よね、大丈夫なの？」

鈴仙「師匠が認識を操る術式をしているから他の一般患者にはウサ耳なんて動じていないわ、これがあたりまえみたいなかんじね」

霊夢「主はどうしたの？」

鈴仙「気がついたら居なくなっていたのよ、どこでなにをしているのやら」

霊夢「意外と近くに居たりしてね」

鈴仙「まさか」

これがまさかなのは後で知ることになるだが今の二人には知るよしも無かった。

【夕方】

日も暮れ夕方になったとき周りで寝ているみんなを見ていた。

霊夢「魔理沙、あなただったどうする？ 勘で動く私と違って……
つと言つても、答えを出すのは私自身……紫……そういえば紫はど
うなったのかしら」

？「紫は死んだわ、だから滅んだのよ」

霊夢「あんたは」

いつのまにか着物をきた女性が居た、しかも浮遊していた。

霊夢「幽々子？」

幽々子「久しぶりね霊夢」

霊夢が幽々子と呼んだ女性は白玉露の主で庭師の主でもある西行寺
幽々子であつた。

霊夢「なんでここに？」

幽々子「なにつて妖夢のお見舞いよ」

霊夢「あんた冥界はどうしたの？」

幽々子「冥界は幻想郷と切り離れたから無事よ、しかし」

霊夢「しかし？」

幽々子は重たい口調で話す

幽々子「紫の魂がないの」

霊夢「え？　そういえば紫が死んだって本当なの！」

幽々子「ええ、紫は最後の力を使い敵を倒した、そして代償として生命力をすべて使い果たして死んだわ」

霊夢「紫が死んだんじゃあ……もう絶望しか」

幽々子「でも希望もあるわ」

霊夢「どういうこと？」

幽々子「さっき私が紫の魂がないって言ったわね」

霊夢「ええ」

幽々子「もしかしたら誰かとして転生しているんじゃないと思うのよ」

霊夢「それって本当なの？」

幽々子「閻魔様が紫の魂を誰かが無理やり転生させたって話を盗み聞きしちゃってね」

霊夢「もしかしたら？」

幽々子「だからもしかしたら紫を復活させる事が出来るかもしれないな

い」

霊夢「まじで！」

幽々子「まじよ！」

霊夢「じゃあ、まずは紫の転生先を調べないといけないわね」

幽々子「そうね、それは私にまかせてあなたはこれからどうするか決めなさい」

そう、まだ私は答えをだしていない、だが私は今答えが出た。

霊夢「やっと答えが出た」

すぐさま私は永淋を呼び出した。

永淋「答えは出たのかしら？」

霊夢「出たわ」

永淋「では聞かせてもらいましょう」

霊夢「まず私の姿を15歳の体に戻してほしいの」

永淋「それで？」

霊夢「そして……こんなことを言つとあなたの怒りを貰つ覚悟で言
うわ」

永淋「聞きましょう」

霊夢は冷や汗を掻きながら言った

霊夢「私を蓬莱人にしてほしいの！」

永淋「な！」

意外な答えをぶつけられた永淋はいままでない驚きを見せた。

永淋「霊夢、それが何を意味をするのか分かって言っているの！」

霊夢「分かっているわ、けど私は死ぬわけはいかないの、幻想郷を元通りにするまで。そしてそれが人間のままでどのくらいの年月が掛かるか分からないのよ、だから私は人間をやめるわ。でもそれだけじゃない紫を復活させる目的もあるわ、そして目的が達成したときは蓬莱人から人間に戻す薬を作ってほしい……」

永淋「……たしかに私なら作れないけど、ただし保障はできないわよ永遠に生きることになるわ、果たして永遠を生きる苦しみにあなたが耐えられるかどうか。」

霊夢「それは覚悟の上よ」

永淋「姫様と同じことを言うのね……分かったわ、でも3日は待ってもらおうわ」

霊夢「何か問題があるの？」

永淋「あれは嚴重に保管してあるの私でも手こずる術式でね、まあ

期待しないで待っていなさい」

そう言つて永淋は部屋を出た

幽々子「私の天敵になる覚悟なのね」

霊夢「まあ、邪険にしないでよ」

幽々子「邪険にはしないわ、とりあえず転生先を割り出したら知らせるわ」

霊夢「頼むわね」

そして3日後

私が蓬莱人になる時が来た。

永淋「まずはこれを」

永淋は薬を渡す

霊夢「これが」

永淋「まずは若返り薬よ」

私は薬を飲んだ、そして体全体が熱くなり、気がついたら。

霊夢「はあ…はあ…どう？」

永淋「はい」

永淋は鏡を靈夢に渡した

靈夢「戻っている」

鏡を見た靈夢は15歳の少女に戻っていた。

永淋「そしてここからが本番よ」

靈夢「そうね」

永淋は靈夢に蓬莱の薬を渡す、そしてそれを恐る恐る手に取った靈夢

永淋「引き返すなら今のうちよ」

靈夢「覚悟を決めたのよ、だから！」

私は勢いにまかせて薬を飲んだ

永淋「……飲んだわね」

靈夢「……なにも変わった様子は……」

永淋「最初はこんなものよ、そして地獄の始まりよ」

靈夢「……永遠の若さと命の地獄ね」

永淋「そうよ、そしてあなた今日から退院よ、どこへ行くなり好きにしたら」

霊夢「そうね……じゃあまたいつか会いましょう」

永淋「そうね」

そして私はここを出て外の世界へと旅立った……っが

【????】

霊夢「迷った」

その世界の知識が無い私は当然道など分かるわけがなかった……そして私はさ迷い歩きふと目の前に店らしき場所にたどり着いた。

霊夢「翠屋^{みどり}って読むのかしら？」

私は関係ないことだからこのままこの場所を立ち去った。

さらに歩いた霊夢は何時の間にか夜になっており、そしてどこかはずれの場所にたどり着いた、そして屋敷らしき物が見え、交渉して泊めてもらおうかと思いそこに向かった。

霊夢「古明地寮？」

屋敷にたどり着いた私は門に抱えていた文字読んだ古明地寮と書かれており、ここはもしかしてと霊夢は思った。

霊夢「地底のさとり妖怪がいる？」

まさかと思い勝手に中に入った。

そして

【古明地家 さとりの部屋】

夕食を終えた私は部屋で漫画を読んでいます、もちろん裏の仕事をやるきつかけになった漫画です銃を持った男性が町を巢食うゴミを片付けるスイーパーのお話の漫画です。

さとり「何時読んでも面白い話です」

そんなときだった

【ピーン】

さとり「侵入者？」

すぐさま私は武器（銃）を取り出し迎撃しに向かった

【霊夢Side】

霊夢「やっぱり妖怪の気配がするわね……ん？」

？「動かないでください」

霊夢「……やっぱりあんたか古明地さとり」

さとり「霊夢さん、いやそんなはずは」

霊夢「本当なら40代のおばさんよ、でも若返って15歳に戻ったのよ」

さとり「……そうのようですね、心を読んで分かりました」

霊夢「なら話が早いわ」

さとり「とめてほしいのですか？」

霊夢「そうよ」

さとり「……というよりここに住みませんか？」

霊夢「はい？」

追い出されるかと思った霊夢だったが意外な答えにすこし戸惑う。

霊夢「いいの？」

さとり「心を読んだところあなたは無賃のようですが……その代わり仕事が見つかるまで事務仕事を手伝うのが条件ですが」

霊夢「なんだっていいわ」

そして私はここに住むことになった、そしてこれが私の第一歩にな

つ
た。

第5話 もうすぐ始まる大異変なのかな？B Y輝夜（後書き）

ハチミツ「とりあえず霊夢復活です」

さとり「なんで不老不死に？」

ハチミツ「それはですね秘密です」

さとり「まあいいでしょう、他の幻想郷の住民はどうなるのですか？」

ハチミツ「ちゃんと話に絡ませますよ」

さとり「…お空とこいしの出番は？」

ハチミツ「どこらへんで出すかは未定です」

さとり「早く出してくださいね」

ハチミツ「……はい、では次回で」

第6話 就職活動がこんなに大変だったとはB・Y・霊夢

【古明地寮4号室 霊夢の部屋】

霊夢「ふとんがほしいわ」

さとりと交渉が成立して私は部屋を借りられて寮の部屋にいるわ、そして私はさとりから説明を受けている」

さとり「それは自分で用意してください家具も」

霊夢「だよね……とりあえず仕事は探すし手伝いもするわ、そしてごはんも……」

さとり「しかたありませんね。」

霊夢「ごめん」

さとり「ちゃんと仕事をしていてくれれば文句はありません」

霊夢「悪いわね、じゃあ明日からよろしくね」

さとり「それは私のセリフなんですが……まあいいでしょう、それでは明日からがんばってください」

さとりは部屋の鍵を霊夢に渡した後自分の部屋と帰っていた。

霊夢「神社が恋しいけど、辛抱しないと」

そして私は布団なしで一夜を明かした

【翌日】

【古明地家 リビング】

あれから3年の月日が流れ春の季節になり私は3年生になりました、9歳となった私ですが変わった事があった、それは私が朝起きて朝食を食べようとリビングに行ったときでした。

？「悪いわね」

お燐「お姉さんも生きていたんだね」

ヒカリ「……………」

それは目の前に東方キャラの主人公の博麗霊夢が朝食をたべていたのだから

さとり「ヒカリおはよう」

ヒカリ「ママおはよう」

霊夢「あんた誰？」

ヒカリ「古明地ヒカリです」

霊夢「博麗霊夢よ………… あれ、古明地って？」

ヒカリ「はい」

ゴハンを食べ支度をした私はフェイトちゃんと合流して門を出た時だった

霊夢「ヒカリどこへ行くの？」

門の前で掃除している霊夢がいた

ヒカリ「学校ですよ霊夢さん」

霊夢「学校……寺小屋みたいなところね」

フェイト「ヒカリこの人は」

ヒカリ「今日から家で働くことになった霊夢さんですよ」

霊夢「博麗霊夢よ、よろしく」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

霊夢「よろしくね、じゃあ行って来い！」

ヒカリ「はい！」

ヒカリとフェイトは学校へと向かった。

【ヒカリSide】

バス停に着いた私とフェイトちゃんはなのはちゃんと合流した、そしてバスが到着して私たちは乗り込む。

アリサ「こっちょ!」

奥のほうの席でアリサちゃんが私たちを呼んでいた、私達は奥へと向かった。

アリサ「おはよう」

なのは「おはようアリサちゃん、すずかちゃん」

すずか「おはようみんな」

いつもどおりの朝の挨拶をしたあと、変わったことがないかをいろいろ話をした、バスは学校に着き私達は降りて登校した。

【3年1組】

輝夜「おはようみんな!」

いつもどおり輝夜先生の授業が始まり1時間目と2時間目……そして3時間目は将来についての話だった……そして4時間目は体育だった。

なのは「着替えようか」

ヒカリ「はい」

アリサ「男子は出て行け!」

しゅしゅ出て行く男子、残った女子全員はさっさと着替えをすませ外に出た

【校庭】

輝夜「はい整列して」

校庭に出た私たちは整列して輝夜先生から今日の体育の種目を説明を聞いている

輝夜「今日はドッジボールをやるわよ、そしてチームの構成はこうよ」

輝夜先生の決めたチーム構成でチームを作った。

配置に付き私のいるメンバーはこうだった。

【ずずか ヒカリ その他の女子3人と男子3人】

相手チーム

【アリサなのは フェイト その他の女子2人と男子3人】

輝夜「それじゃあ始めるわよ！」

輝夜は笛を鳴らしボールを上投げる、ジャンプボール担当はフェイトちゃんとずずかちゃんだった、二人は思いつきジャンプしてどちらかこっちのボールにするかが決まる。

フエイト「はあああ！」

すずか「やあああ！」

【バシン！】

そして

ヒカリ「え？」

ジャンプボールではじかれたボールはヒカリにめがけて飛んできた。

【デーン！】

すずか「……あ」

フエイト「……ヒカリ？」

なんとかボールをキャッチしようとしたが不意打ちだったため、顔面キャッチをしてしまった。

ヒカリ「……………」

輝夜「こ…古明地さん大丈夫！」

心配した輝夜はすぐさまヒカリに駆け寄った、そしてボールを取るとヒカリの顔はボールの痕で真っ赤だった。

【たらし】

輝夜「大変鼻血が出てきたわ！」

なのは「私が保健室へ連れて行きます！」

輝夜「高町さんお願いね」

なのは「ヒカリちゃん行こう」

ヒカリ「……はい」

そして私はなのはちゃんに付き添われて保健室へ向かった。

そして一方その頃。

【霊夢Side】

霊夢「さて、それじゃあ行きますか」

私はさとりから仕事がありそうな場所を教えてもらい、商店街という所に足を踏み入れた、ここは昨日私がさ迷って歩いていた所らしく夜とちがいきほし活気がたっていた。

霊夢「とりあえず探してみますか」

霊夢は一軒一軒探すことにした。

【古明地家 リビング】

お燐「そういえばさとり様」

さとり「なんですかお燐」

お燐「霊夢さんなんですけど、身分証明がないとだめなんじゃあ…」

さとり「…あ」

霊夢に肝心なことを言うのを忘れていたさとり

さとり「……とりあえず帰ってきたら発行の仕方を教えないといけませんね」

【ヒカリSide】

時間は流れお昼になり私は保健室から教室へと戻り着替えを終える、そして鈴鹿ちゃんとフェイトちゃんにごめんねと謝れたが、私は気にしていませんよと言った。そしてお弁当の時間なので、私となのはちゃんとフェイトちゃんすずかちゃんとアリサちゃんは屋上でシートをひいて囲ってお弁当を食べながらお喋りしたりした。

アリサ「そういえば将来は何にするか決まってる？」

すずか「そうだね、私は機械が好きだから工学系で専門職がいいと思うってるんだけど」

なのは「へえ、そうなんだ」

アリサ「私はママとパパが会社経営だしいっぱい勉強してあとを継がないと」

フェイト「やっぱりそうなるんだね、ヒカリは？」

ヒカリ「わたしですか？」

そう言われると私は何になりたいんだろうか。

ヒカリ「えーと……ポケモンかな」

アリサ「なにそれ？」

ヒカリ「なんといいいますか、ポケットモンスターといまして、まあモンスターを育てて強くして、冒険したり相手のモンスターと対戦したり、いろいろあるのです」

すずか「すごい、でも全然知らないよ」

アリサ「昔のゲームなの？」

ヒカリ「えーと、私の夢の世界です」

アリサ「なんじゃそりゃ……って、将来に何も関係ないじゃないの！」

なのは「でもおもしろいね」

フェイト「うん」

メルヘン子だと思われたかな、でも前世の世界ではゲームでそんな
いしていましたけど

すずか「じゃあ、なのはちゃんは？」

アリサ「もちろん喫茶翠屋の2代目よね」

なのは「……うん、それも一つのビジョンであるんだけど、やりた
いことがなにかあるような気がするんだけど……まだそれがなにかは
つきりしないんだ」

フェイト「私もなのはと同じだよ、私もはつきりしないんだ」

すずか「フェイトちゃんも？」

なのは「それに私は特技があってもとりえがないし」

なのはがそう言ったときだった

アリサ「ばかちゃん！」

【ぺちん！】

なのは「あう」

アリサは立ち上がりお弁当に入っていたものだろうかレモンをな
のはに投げつけた。

アリサ「自分からそう言うことを言うんじゃないの！」

すずか「そつだよ、なのはちゃんにしかできないことがきつとあるよ」

アリサ「だいたいあんた理数がこの私より成績がいいじゃないのよ、それでとりえがないとどの口が言うわけ！」

アリサはなのはを押し倒し両手でなのはの口をびよゝんした。

なのは「はあつてなのはうんけいにはてはしたひいくはほこほこでひるへど（だってなのは文型苦手出し体育もそこそこできるけど）

すずか「だめだよ二人とも……えーと、メっだよ……っメ！」

ヒカリ「あははは……」

フェイト「あうあう……」

この光景に私はただ笑うしかありませんでした。

【夕方】

【商店街 霊夢Side】

霊夢「疲れた……」

あれから私は仕事を捜し歩いたが全部不発で終わってしまった、そして途方に暮れたような気分になり今日は諦め寮に帰ることにした……っと、思ったとき。

霊夢「……ん？ あれは」

私はある店の看板が目に入った。

霊夢「喫茶翠屋」

そう、昨日私がさ迷っているときに目にした店の名前だった。昨日は店が閉店していたのか今日は明かりがついていた、そして私は吸いこれるように店の前に立った

霊夢「なんでだろう？……なんでここに着たんだろう？」

霊夢が見ているのに気がついたのか店の人が出てきて霊夢に声をかけてきた。

店員「どうしたんだい？」

霊夢「あ、いえ……その」

いきなり声をかけられたので私は戸惑ってしまった。

店員「ん？」

霊夢「……綺麗なお店ですね」

私は何を言っているか、いくらなんでもいきなり綺麗な店ですと言っただけなんだと。

店員「そう言ってくれるとこっちも嬉しいよお嬢ちゃん」

お店を褒められたのが嬉しかったらしい店員さんであった。

？「あなたどうしたの？」

店員「桃子すまない……」

？「あらその子は？」

店員の一人なのか女性が出てきた。

店員「この子が店の中を見ていたから声をかけていたんだよ、そうしたら店を褒めてくて手ね」

？「あら、そうなの……あ、私は高町桃子よ」

店員「そして俺はこの店のマスターで高町士郎だよ……それで君は？」

霊夢「博麗霊夢です」

士郎「霊夢ちゃんて言うんだ……それはそれとしてなんで家の店を見ていたのかな？」

霊夢「……実は」

【少女説明中】

士郎「そうか仕事を探しているんだ……でも君は15歳くらいに見えるけど」

霊夢「これでもちゃんと成人しています」

間違っではないない実際は40代の女性なんだから…しかし

桃子「なにか身分証明みたいなのは？」

霊夢「え？」

そういえば外の世界はなにか自分を証明するものを用意していない
といけないんだと紫から聞いていたことを思い出した。

霊夢「……ありません」

私はそう言わざるえなかった。

士郎「そうか……そうだ、次から身分証明と履歴書を持ってまた着
て欲しい」

霊夢「どういことですか？」

士郎「ちょうど正社員が欲しいと思ってたんだ、だから君が第1
号としてうちで働いて欲しいんだ、だから予約みたいなものだよ」

すごいご都合主義な展開しになったけどこれを逃すわけにはいかな
かった。

霊夢「では次はちゃんと持ってきます！」

士郎「ああ、待っているよ！」

そして私はすごい勢いで寮に帰り、さとりを引っ張り出して市役所という所に向かい身分証明の作り方をさとりから教えてもらい。

さとり「ここは名前と住所を」

霊夢「えーと住所は」

さとり「。県海鳴市1-19-1です」

霊夢「電話番号は？」

さとり「。。。。。。。です」

そしてあれやこうだろと言われながらなんと書類を掻き終え私は受付に向かった。

そして

霊夢「できた」

しばらくして発行が完了して私は受け取る、そしてそのあと履歴書の書き方を教わり、経歴はさとりの偽造を使い書き終えた。

そして

もう太陽が沈む賭けあたりが暗くなっていた、しかし霊夢に不可能という文字はない、人気の無い所に向かい空を飛んだ、そのあと飛

んでいる所を一般人に見つかるわけにはいかなかったので偶々落ちていた新聞を盾にして飛んだ…そして

【翠屋】

こっそり店の裏に降りた霊夢はすぐさま店のドアに向かった。

【チリン♪】

私はドアを開けと鈴の音になった、その音に気づいた士郎さんがこっちに来た。

士郎「いらっしや……霊夢ちゃんじゃないか」

私は士郎さんに履歴書を渡した

霊夢「持って来ましたよ」

士郎「……よし、これでいいよじゃあ明日から開店前に着て欲しい、集合時間は朝9時に着て欲しい」

霊夢「わかりました、それでは」

私は浮き足で寮に帰った。

【古明地家 リビング】

霊夢「ふんふん」

さとり「随分と上機嫌ですね」

霊夢「やっと仕事が見つかったのよ」

さとり「以前のあなたからは考えられない行動ですけど」

霊夢「仕事を見つけてって言ったのはあんたじゃないのよ、それに今の自分の立場を分かっているし」

さとり「何時まで持つのやら」

霊夢「大丈夫よ……それよりごはんはまだかしら？」

さとり「……ちゃんと収入が安定するまでですからね」

ごはんを作り終えたお隣が食事をテーブルに並べてた、あとからヒカリもやってきた

霊夢「ゴハンのときが一番の幸せ」

そして霊夢はゴハンを食べた後自分の部屋に戻りそしてさとりからタオルを借りて風呂に入った。

【風呂場 女湯】

霊夢「ふう………そういえばお風呂に入ってたのって久しぶりのような気がするわ」

？「霊夢さん」

霊夢「ん？」

私は声がしたほうへ向くとタオルを巻いたヒカリとフェイトがいた

霊夢「ヒカリじゃない、あんたもお風呂入りに来たの？」

ヒカリ「はい、一応家のお風呂でもありますので」

フェイト「霊夢さんこんばんは」

霊夢「こんばんは………そういえばあんた親は？」

フェイト「お母さんは出張であと1ヶ月は帰ってこないんだ」

ヒカリ「………そういえばアリシアさん最近見ないと思っていたらそういうことですか」

フェイト「うん」

霊夢「………ってことはあんた一人なわけ？」

フェイト「………うん」

霊夢「………あ」

余計なことをしたかなと思った霊夢。

霊夢「………ごめん」

フェイト「いいんですよ、寝る前にちゃんと電話をくれますから」

？「それじゃあ1ヶ月は家にゴハンを食べにきませんかフェイトちゃん」

ヒカリ「ママ」

暗い話をしているときさとりが割って入ってきた。

フェイト「……でも」

ヒカリ「私は賛成ですよ、だからフェイトちゃん」

フェイト「本当にいいのヒカリ？」

さとり「家主である私が言うのだから、いいのです」

フェイト「ありがとうございます」

霊夢「よかったわね」

フェイト「はい！」

そして私はお風呂から出て体を拭き着替えて部屋に戻った。

【霊夢の部屋】

霊夢「家族か……」

そつえば自分は気がついたら巫女をやっていた、それはいつだった

か覚えていない。そして私は父親と母親の顔さえ知らない。

霊夢「……まあいつか、寝よう」

そしてさとりにも借りた毛布にくるまって眠った

そして

霊夢「……ん？」

眠っていた私だったが、胸騒ぎがして目を覚ました。

霊夢「なに……あれは！」

霊夢は窓の外を見るとピンク色の光柱が天を貫いていた。

霊夢「……異変？」

私はいつもの勘でそう思った、しかし外の世界のゴタゴタに巻き込まれるは簡便して欲しかった……そう思ったときだった。

霊夢「ヒカリ？」

ヒカリが光柱のほうへ飛んでいくのが見えた。

霊夢「あの子なにを……ん？」

そしてさらにフェイトが出て行くのも見えた、そして私は

霊夢「……ふう、仕方が無いわね」

私は窓を開け空を飛び二人を追いかけた、そしてこれが私を大きく
変える事件であった。

第6話 就職活動がこんなに大変だったとはB Y 霊夢（後書き）

ハチミツ「この住所は架空なので」

さとり「わかっていますよ」

ハチミツ「ですよね」

さとり「それで次は」

ハチミツ「覚醒です」

さとり「そうですね、ではこのへんで次回をお楽しみにください」

ハチミツ「セリフを取られた」

第7話 最初の魔法はリリカルなの……でいいのかな？B Yなのは

霊夢が二人を追う時間から今日の未明まで時間は遡る

【???】

？「しまった！」

暗い森らしき場所で一人の少年が黒い塊のようなものと戦っていた
……しかし

？「ぐおおおおお！」

【ドン！】

少年「ぐああああ！？」

少年は黒い塊の攻撃によって倒れてしまい逃してしまった……だが
少年は。

少年《だれか…僕を助け欲しい》

そして少年は気絶してしまう、しかしそのまえに少年は姿を変えた。

【朝】

【高町家　なのはの部屋】

【くっ】

なのは「……………うん」

なのはの部屋に携帯電話のメロディが響く。

なのは「……………朝…今の夢は？……………それより」

私はベッドから出て携帯の音をとめる、そして時間を見ると朝5時だったそして私は寝巻きを脱いでジャージを着た。早朝ランニングをするために体操して顔を洗い靴を履いて外に出た。

【通り】

なのは「はあ…はあ…」

私は体を鍛えています、理由は5歳のときにヒカリちゃんを私たちが家族の事情で巻き込んでしまったからです、私が強かったら誘拐されてなんていなかったかもしれない。そしてヒカリちゃんがあんなことにならなかったかもしれない、だから。

なのは「私は強くなってヒカリちゃんを守る……………！」

そして私は家に帰りランニングを終える、そしてそのあとは裏にある道場にむかった。

【道場】

私は自分専用の竹刀を持って素振りを始める、しばらくして二人の人物が道場に入ってきた。

？「なのは、がんばっているな」

？「ごくろうさま」

なのは「お姉ちゃん、お兄ちゃん」

私がお姉ちゃんとお兄ちゃんと呼んだ人は、高町家の長男で高町恭也お兄ちゃん。そしてお姉ちゃんと呼んだ人は高町家の長女で高町美由紀お姉ちゃんです。二人は道場でいつも剣に日々努力をしている、たまに私も打ち合いをしています。

恭也「それじゃあ今日も始めるか」

なのは「うん」

そしてお兄ちゃん達と一緒に素振りをしながら打ち合いをした、そして

【１時間後】

恭也「そろそろこのへんで終わらせよう、学校に遅れてしまう」

なのは「はい」

美由紀「なのは一緒にシャワー浴びよう」

私はお姉ちゃんと一緒にシャワーを浴びる、そして体を拭き用意していた下着と学校の制服をきてリビングに向かった。

【リビング】

リビングに着くと、テーブルの上に朝食が用意しており。すでにお父さんとお母さんがテーブルで待っていた。

？「おはようなのは」

お父さん名は高町士郎喫茶翠やの店長さん、そしてお母さんは高町桃子喫茶翠屋のパリスエでケーキやいろいろなお菓子が作れる。そして喫茶翠屋はほかにケーキの販売もしています。

なのは「おはようお父さん、お母さん」

桃子「おはようなのは」

あとからお兄ちゃん達もやってきて全員揃った所でいただきますをするのが家の家訓の一つ、そして私は朝食を食べていろいろお話ししたりする。そして食べ終わり歯を磨き鞆を持って学校に向かった。

【バス停】

ヒカリ「おはようなのはちゃん」

フェイト「おはようなのは」

なのは「おはよう二人とも」

私はいつもどおり二人を合流した、そしてバスが来て乗る。

バスに乗るとアリサちゃんが手を振っていた、そして私達は奥に行った。アリサちゃんとすずかちゃんと合流して学校に着くまでお話をした。

【3年1組】

学校に付くと先生が来るまでいつものメンバー（アリサちゃんとすずかちゃんとフェイトちゃんとヒカリちゃん）でお話をする、そしてチャイムが鳴り席に着いた。

【ガラ】

輝夜「おはようみんな！」

いつも元気な輝夜先生がやってきた、そして朝礼の挨拶をして必要事項のお知らせを聞いた。

輝夜「今日もがんばろう！」

そして1時間目……2時間目……3時間目は将来についての話だっ

た……そして4時間目は体育であつた。

アリサ「男子は出て行け！」

なのは「早く着替えよう」

ヒカリ「はい」

体操着に着替えた私は校庭に出た。

【校庭】

輝夜「それじゃあ整列して、今日はドッジボールをやるわよ。そしてチーム構成はこうよ」

私は輝夜先生が構成したチームの輪にはいった、こっちはアリサちゃんとフェイトちゃんと私と他の女子2人と男子3人。相手はすずかちゃんとヒカリちゃんと他の女子3人と男子3人だった。あとは外野攻めの子

輝夜「それじゃあ行くわよ！」

輝夜先生は笛を鳴らしたあとボールを上投げた、そしてジャンプボールはフェイトちゃんとすずかちゃんだった。そのときだった。

【バジン！】

ヒカリ「え？」

弾かれたボールはヒカリめがけて飛んでいったの……そして。

【デーン！】

すずか「……あ」

フェイト「ヒカリ……？」

ヒカリ「……………」

なんとヒカリちゃんはボールを顔面キャッチをしてしまったの。

輝夜「こ…古明地さん大丈夫！」

すぐさま輝夜先生がヒカリちゃんの所に駆け寄った、そしてボールを外すと、ボールの痕で顔が真っ赤になっていた。

【タラリ】

輝夜「大変鼻血が出てきたわ！」

なのは「私が保健室へ連れて行きます」

輝夜「高町さん頼むわね」

なのは「はい、行こうヒカリちゃん」

ヒカリ「……はい」

そして私はヒカリちゃんを連れて保健室へ向かった、そして保健室へ付くとヒカリちゃんを保健室の先生にまかせて授業に戻った。

輝夜「古明地さんは？」

なのは「鼻血が止まらなくてこのまま授業を休むそうです」

輝夜「そう、しかたがないわね」

もちろん嘘です、ヒカリちゃんに無理をしてほしくないから。

輝夜「それじゃあ、再開するわよ」

試合は再開したが、でもすずかちゃんの圧勝だった。

そして4時間目は終わり教室に戻ったときヒカリちゃんが戻ってきた、そのあとすずかちゃんとフェイトちゃんはヒカリちゃんに謝っていた。そして着替えを終えて私はいつものメンバーでお弁当を持って屋上に上がった。

【屋上】

屋上に上がりシートを引いて輪になってお昼ごはんを食べながらお話をした。

アリサ「そういえば将来何にするか決まっている？」

すずか「そうだね、私は機械が好きだから工学系で専門職がいいと思っただけ」

なのは「へえ、そうなんだ」

アリサ「私はママとパパが会社経営だし、いっぱい勉強して跡をつがなきゃあ」

フェイト「やっぱり、そうなんだ……ヒカリは」

ヒカリ「わたしですか？」

ヒカリちゃんはどうな将来なんだろう？

ヒカリ「えーと……ポケモンかな？」

アリサ「なにそれ？」

ポケモンってなんだろう聞いたこともないし

ヒカリ「なんといいますか、ポケットモンスターといまして。モンスターを育てて強くして、冒険をしてり相手のモンスターと対戦したりいろいろあります」

すずか「すごい、でも全然知らないな」

アリサ「それって昔のゲームなの？」

ヒカリ「私の夢の中の世界です」

アリサ「なんじゃそら……って、将来に何も関係ないじゃないの！

なのは「でもすごいね」

フェイト「うん」

ヒカリちゃんはこのいうことも言うんだ……っと、思ったのはである。

すずか「じゃあ、なのはちゃんは」

アリサ「もちろん喫茶翠屋の2代目よね？」

なのは「……うん、それもひとつのビジョンでもあるんだけど。やりたいことがまだあるような気がするんだけど、まだそれがなにかはつきりしないんだ」

フェイト「わたしもなのと同じだよ、私もはつきりしないんだ」

すずか「フェイトちゃんも？」

なのは「私は特技があってもとりえがないし」

私がそう言った時だった

アリサ「ばかちゃん！」

【ペチン】

なのは「ふえ」

アリサちゃんがお弁当に入っていたレモンを投げてきた

アリサ「自分からそう言うことを言うんじゃないの！」

すずか「そうだよ、なのはちゃんにしかできないことがきつとあるよ」

アリサ「それに理数の成績がこの私よりもいいじゃないのよ、それを取りえがないとどの口が言うわけ！」

アリサちゃんは私を押し倒して両手で私の口を広げた

なのは「はあつてなのはうんへいにはてはしたひいくはほこほこでひるへど（だってなのは文型苦手だし体育はそこそこできるけど）

すずか「ふたりとも……っメだよ！…っメ！」

ヒカリ「あはははは」

フェイト「あうあう」

やっとのおもいでアリサちゃんは私を解放してくれました、そして。

【夕方】

学校が終わって夕方になりいつものメンバーと一緒に帰ってきてでした。

アリサ「こっち」

突然アリサちゃんが茂み道らしいところに私たちを招こうとしていた。

すずか「そっちは」

アリサ「こっちは塾に行く近道なのよ」

なのは「そうなんだ……フェイトちゃんとヒカリちゃんは」

私とアリサちゃんとすずかちゃんはちゃんは塾に通っているが、ヒカリちゃんとフェイトちゃんは独学で塾に行ってはいない。

ヒカリ「別に構いませんよ遠回りもたまにはいいですし」

フェイト「うん」

アリサ「なら行きましょう」

そして私たちはアリサちゃんに着いていった

ヒカリ「こんな道なんてあったのですね」

アリサ「最近見つけたのよ」

すずか「そうなんだ」

そう話しているときでした

？《だれか》

なのは「え？」

私の頭の中に声が響いた。

なのは「……………」

なのはは周りを見回すがなにもない。

アリサ「どうしたのなのは？」

なのは「声が……………」

アリサ「声？」

《だれか》

アリサ「っ！ この声……………」

すずか「夢の」

フェイト「もしかしてなのは達も聞こえるの？」

なのは「うん、みんなも?」

ヒカリ「……たしかに声が聞こえますね」

なのは「こっち!」

アリサ「なのは!」

なのは声がしたほうへと走った、そしてなのはのあとをアリサ達は追う。

声がしたほうへ急いで向かうとそこには。

なのは「……この子は?」

いそいで駆けつけたなのはの目に映ったのは首に赤い玉のついたア
クセサリーにかけていて体中傷だらけのフレットだった。

なのは「大丈夫!」

なのはフレットをやさしく抱いた、そして。

アリサ「なのは!」

なのはを追ってアリサたちもやってきた。

アリサ「なのは……って、その子ひどい怪我じゃないの!」

すずか「この子がさっきの?」

なのは「わからない、でもはやくお医者さんに見せないと。」

フェイト「そうだね」

ヒカリ「応急処置なら私はできます」

なのは「え、本当？」

そう言つてヒカリちゃんは鞆をあけてハンカチと何かを取り出した。

フェイト「それはなに？」

ヒカリ「キズくすりです……さあ、その子を私に」

私はヒカリちゃんにフェレット君を渡す、そしてハンカチにキズくすりを染み込ませて、フェレット君の体をやさしく拭いた。そしてそのハンカチでフェレット君を包んだ。

ヒカリ「悪魔で応急処置ですので」

なのは「うん、診療所がある所知っているから。」

すずか「急ごう!」

そして私達は診療所に向かった。

【診療所】

診療所についた私たちはすぐさま先生に見せた。

なのは「おねがいします」

？「ここは人間の診療所なんだウサ」

アリサ「お願いします！」

？「……しかたがないウサね、ちょうど凄腕の先生がたまたまいらしているから、ちょっと見せてくるウサ」

【しばらくして】

？「またせたウサね、入ってくるウサよ」

私達は診察室はいるとケースの中で眠っているフェレット君とスーツを着た女性がいた。

なのは「あの、この子は……」

？「応急処置がよかったからかしら、回復がはいわ誰が？」

ヒカリ「私です」

？「あなたが……ふふふふ、あなたのおかげでね治療がやりやすかったわ」

ヒカリ「いえ、当然のことをしたまでです」

すずか「あの、それでこの子は」

女医「うーん、一日預かって様子を見ましょう……っと、いいたいのだけど私は病院のほうにもどらなければいけないの。だからあとはこの因幡にまかせるわ、おねがいね」

因幡「分かったウサ永淋様」

フェイト「でもこれで安心だね」

すずか「そうだね」

なのは「……あ」

気がつくとフェレット君は目を開けていた。

ヒカリ「起きたみたいですね」

なのは「ゲージを開けても大丈夫ですか？」

女医「ええ、構わないわ」

なのははゲージを開ける、そして。

すずか「かわいいよね」

なのは「うん」

そしてなのはが人差し指をフェレット君の前に出すと

【ぺろ】

アリサ「舐めた」

すぐさまなのは思った。

かわいい

そしてそのあとフェレットが無事にだとわかったら安心して診療所を出た、そしてヒカリちゃんとフェイトちゃんと別れて、私とアリサちゃんとすずかちゃんは塾に向かった。

【ヒカリSide】

私はなのはちゃんとすずかちゃんとアリサちゃんと別れ、私とフェイトちゃんは寮に帰った

【古明地寮】

フェイト「じゃあねヒカリ」

ヒカリ「また明日」

そしてフェイトちゃんと別れ私は家に入った。

【古明地家 リビング】

ヒカリ「ただいま」

お燐「お帰りヒカリちゃん」

ヒカリ「あれ、ママは？」

お燐「さとり様はいきなり帰ってきた霊夢さんに連れて行かれたよ」

ヒカリ「そうですか」

お燐「とりあえず着替えてきな」

ヒカリ「うん」

そして自分部屋に戻った

【ヒカリの部屋】

私は部屋に戻ると制服を脱いで私服に着替える、そしてベッドにおもいきり飛び込んだ

ヒカリ「……まさか」

さっきの診療所で意外な人にあつてびっくりした、東方キャラで永遠亭の薬剤師八意永淋がいたのだから。

ヒカリ「びっくりしました……どんな病気を引き起こしても安心できます、そして。やってきて欲しくない物がやってきましたね」

そう、今日拾ったフレットが原因だから……けど邪険にしているわけではない。ただ問題なのはジュエルシードがこの世界に飛来したことである。

ヒカリ「私に封印作業はできません……しかし、このままなにもなかった事にできませんし。まあ、時に身を任せてみましょう」

あせった所でどうにもなるわけではないただ手助けならできる。

お燐「ヒカリちゃんごはんだよ！」

お燐姉さんが呼んでいる、すぐさま部屋を出てリビングへと向かった。

【リビング】

私がリビングに着くといつのまにかママが帰っていたらしく、そしてくつろいでいる霊夢がいた。そして霊夢さん仕事が見つかったらしく上機嫌だった、そして夕食を食べ終えた私はお風呂に向かった。

【女湯】

脱衣所入った私は服を脱ぐ、そして服を脱いでいるとフェイトちゃんが声をかけてきた。

フェイト「ヒカリ」

ヒカリ「フェイトちゃん」

フェイト「一緒に入ろう」

そして二人は脱いだ服を籠に入れて、バスタオルをまいてお風呂場に向かった

私は体にお湯をかける、そしてそのあと浴槽に向かうと霊夢さんが大の字でくつろいでいた。

ヒカリ「霊夢さん」

霊夢「ヒカリじゃないの、あんたもお風呂に入りに来たの？」

ヒカリ「ええ、一応家のお風呂でもありますので」

フェイト「こんばんは霊夢さん」

霊夢「こんばんは……そういえばあんたの親は？」

霊夢がそう言うとフェイトちゃんは寂しげな表情になった、そういえばアリシアさん最近見かけないとおもっていた所です。

フェイト「おかあさんは出張であと1ヶ月は帰ってこないの」

霊夢「……あ」

ヒカリ「最近アリシアさんを見かけないと思ったらそついつとで
すか」

霊夢「……ごめん」

アリシア「いいんですよ、寝る前にちゃんと電話をくれるから」

？「それじゃあ1ヶ月の間は私の家でゴハンを食べませんかフェイ
トちゃん」

ヒカリ「ママ」

いつのまにかママがいた

フェイト「……でも」

どこかで遠慮しているフェイトちゃんに私は

ヒカリ「私は賛成ですよ、だからフェイトちゃん」

フェイト「……本当にいいの？」

さとり「家主の私が言うのだからいいんですよ」

フェイト「ありがとうございます」

霊夢「よかったわね」

フェイト「はい」

そしてそのあと私とフェイトちゃんは体と髪拭いて服に着替える、そして一応ドライヤーを設置しているので、ドライヤーを使い長い髪を乾かす、そしてフェイトちゃん髪は私が乾かしました。

フェイト「それじゃあまた明日」

ヒカリ「はい」

フェイトちゃんは部屋に戻り、私も部屋に戻った。

【ヒカリの部屋】

寝巻きに着替えた私はベッドの中に入り眠った……っが

ヒカリ「うゝん……っは！」

突然ヒカリは飛び起きた

ヒカリ「なんなんだろう、なにかが……もしかして！」

すぐさま私は私服に着替えた、そして窓から家を出るとそこに広がる光景があった。

ヒカリ「なにあれ？」

ヒカリの目に飛び込んだ光景はフェレット君がいるあたりだろうところにな大きなピンク色の光柱が出現していた。

ヒカリ「……そっか、そういうことですか」

【そらをとぶ】

ヒカリ「それじゃあ行きますか、あの光へ！」

私はそらをとぶを使い光柱へと向かった。

【フェイトSide】

フェイト「うん、今日もなにも変わらなかったよ」

アリシア《そう、早くかえりたい！》

フェイト「あははは、お仕事がんばってね」

アリシア《はい、じゃあさとりさんにお礼を忘れないでね》

フェイト「うん、それじゃあおやすみなさい」

アリシア《おやすみフェイト》

【っぴ】

私は電話を終えるとすぐさまベッドにはいった、そして。

フェイト「うーん……なんだか眠れないどうしたんだろう」

そのときだった

フェイト「なにあれ？」

フェイトは窓の外を見るとピンク色の光柱が出現していた、そして。

フェイト「なんだろう？……あれヒカリちゃん？」

フェイトはヒカリが飛んでいる所を目撃した

フェイト「ヒカリが空を飛んでいる……行かなきゃ！」

フェイトは私服に着替え部屋を飛び出した（ちゃんと鍵も掛けましたよ）

一方そのころ

【月村家　すずかの部屋】

すずか「なんだろう？」

すずかがたまたま窓の外を見ると、突然光の柱が出現した。

すずか「……たしかあのあたりって……フェレット君！」

そしてすずかは家を飛び出し光柱が立っている場所で向かった。

さらに

【バニング家 アリサの部屋】

アリサ「冗談よね？」

アリサの目に映る光景は窓の外に光柱が立っている風景が見えた。

アリサ「夢じゃないよね？……あ、それにあのあたりって！」

アリサは無断で家を飛び出した。

そして時は遡る

【診療所】

フェレット「……………っは！」

【ドゴン】

？「ぐおおおおお！」

突然診療所の壁を突き破り黒い塊がフェレット君を襲った。

フェレット「僕を追いかけてきたのか！」

すぐさまフェレット君はここから脱出して外に逃げた

【同時刻】

【高町家　なのはの部屋】

【ピーン】

なのは「なんだろう今の胸騒ぎと言うか、だれかが危険な目にあっている」

私はお父さん達に怪我をしたフェレットの事で話し合った、私はそのフェレットを飼いたいという話をした、そして了解を得てアリサちゃん達メールを送った、そしてそのあとだった。

？《聞こえますか、僕の声が》

なのは「あのときの声があたまに」

？《僕の声が聞こえるあなた、お願いです僕にすこしだけ力を貸してください》

なのは「この声の主は、もしかしてあの子？」

？《おねがいじかんがもう》

そして声は消えた

なのは「……行こう、あの子のところへ!」

すぐさまいやな予感がしたなのは黙って家を飛び出した。

【通り】

なのは「行かなきゃ!」

私は走った、フェレット君のところへ。

そしてなのはが診療所の近くに来るとまわりは穴だらけであった。

なのは「まるで怪物が出てきたみたいな……っは!」

【どくん!】

なのは「音が近い、急がなきゃ!」

そしてなのは診療所に着くと不思議感覚が体をよぎった、そして

フェレット「つく!」

なのは「あれは!」

今日助けたフェレット君が黒いなにかに襲われていた、そしてフェレット君がこっち気づきこっちに飛んできた。それをなのははキャ

ツチした。

なのは「なにになに！　いつたいなに……！」

いきなりのことではなのはなにがなんだか分からなかった……する
と。

フェレット「来てくれたんだ」

なのは「うわわわ！　フェレットが喋った！」

いきなりフェレットが喋りだし驚くのは。

そして

？「ぐおおおお！」

黒い塊はなのはとフェレットに目を付けた、そしてすぐさまなのは
はフェレットを抱えてこの場から逃げ出す

【通り】

なのは「はあ……はあ……はあ、そのなにがおきているんだか分からな
いけど、いつたいなんなの！」

フェレット「君には資質がある、お願い少しか僕に力を貸して欲
しいんだ

なのは「資質？」

資質ってなんだろうと思ひ私はフェレット君の話を真面目に聞くにした

フェレット「僕はある探し物のためにこの世界じゃない別の世界から来ました、でも僕の力では思いを遂げられないかもしれない……だから迷惑だとわかっていると分かっていますが、資質のある人に協力してほしくって」

そう言つてフェレットはフェレット君はなのはのから降りた。

フェレット「御礼はします、必ずします……だから僕が持っている力を使つて欲しいです。僕の力を……魔法の力を……！」

なのは「ま…魔法？」

いきなり魔法と言われ私は信じられませんでした、しかし。

？「ぐおおおおおお……！」

なのは「っは！」

さっきの黒い塊が上空からなのは達に突進してきた。

すぐさまなのははフェレットを抱えて避けた

そして

フェレット「お礼は必ずしますから！」

なのは「もうお礼とかそんな場合じゃないでしょう!……っは!」

私はいやな予感がしてさっき黒い塊が落ちたところを見た

?「ぐおおおおお!」

なのは「……あれをどうにかしないと」

そんなときだった。

フェレット「これを!」

なのは「これは?」

さっきまでフェレット君が大事にしていた赤い宝石のようなアクセサリーだった、そしてなのははそれを手にすると。

なのは「あたたかい」

とても暖かった。

フェレット「それを握って目を閉じて心を澄まして、僕の言つとおりに繰り返して……!」

なのは「うん」

フェレット「我…使命を受けし者なり……」

なのは「我…使命を受けし者なり……」

アクセサリーは段々と光を放つ

フェレット「契約の下、その力を解き放て……！」

なのは「えーと……契約の下、その力を解き放て」

【ドクン】

なにかが脈だつた

フェレット「風は空に、星は天に……！」

なのは「風は空に、星は天に……」

【ドクン！】

フェレット「そして不屈の心は」

なのは「そして不屈の心は」

なのは&フェレット「この胸に！」

そして

なのは&フェレット「この手に魔法を！」

覚醒の時が

なのは&フェレット「レイジングハート」

来た！

なのは&フェレット「Set Up！」

【StandbyReadySet Up】

二人がそう答えたときだった、なのはの体にピンクの光が全身を包んだ、そしてその光は柱となり天を貫いた。

？「ぐおおおおお？」

なのは「えーと？」

フェレット「なんて魔力だ……」

そしてフェレットはなのはに近寄る

フェレット「おちついてイメージして君の魔法を制御する杖を、そして君を守る強い衣服の姿を」

なのは「そ…そんな急に言われても、えーと……」

私はイメージした杖を……でも私に必要な武器は杖より……

そしてイメージは固まった

なのは「と…とりあえずこれで！」

そして私の体に異変が起きた、赤い宝石に口付けをしたあと来ていた服が全部消えた、そしてそのあと赤い宝石が姿を変えた、そして自分がイメージした強い衣服が展開される、服は学校を制服をイメージして胸元赤いリボン、そして姿を変えた赤い宝石を手に取り、お約束の決めポーズを決めた

フェレット「成功だ……あれ？」

なのは「なにこれ？」

自分の姿になのはは混乱するが。

フェレット「あの……その手に持っている物は？」

なのは「……え、これ？」

フェレットに指摘されなのはの手に持っていた物はさっき紅い宝

石が姿を変えたものだっただけ、しかし」

フェレット「ぼ…僕は魔法を制御する杖と言っただけだ……」

なのは「やっぱり杖より刀のほうがいいと思って、剣術習っているし」

なのは手に持っていたものは杖ではなく刀であった、そしてこの赤い宝石は刀になっていた。

フェレット「なんで剣に……まあいいか……とりあえず成功だよ」

なのは「にやははは……さて」

なのはの目つきが変わる

なのは「剣を持った以上後は引けないの」

フェレット「変わった……？」

？「ぐおおおお！」

そして黒い塊はなのはと対峙した

そしてこの場所に集まろうとしている者達、果たしていったいどうなのか。そしてなのはの黒い塊との勝敗は……それは天の星達のみが見ている

次回予告

なのは「いつもの日常は去り、私は魔法の世界に一步踏み込んだ」

アリサ「しかしそこになのはを襲った邪気は容赦ない攻撃をする」

ヒカリ「そして集結する私たち」

すずか「なのはちゃん待っていてね」

フェイト「今行くよなのは」

次回 魔法少女リリカルなのは 好きに生きる者 第8話

魔法？魔砲の間違いじゃないの？BYアリサ

ED【Get Wild】

第7話 最初の魔法はリリカルなの……でいいのかな？B Yなのは（後書き）

ハチミツ「ちょっと予告を入れてみました」

さとり「大丈夫なんですかこんなことをして？」

ハチミツ「指摘されたら修正します」

さとり「あなたがそう言うのであればいいですけど」

ハチミツ「それじゃあ次回で」

第8話 魔法？魔砲の間違いじゃないの？BYアリサ

普通の日常で過ごしていた私、高町なのはに起こった事件。私はみんなで助けたフェレット君を診療所に連れて行き、そして治療して終わった後私たちは安心してその場で解散した。その夜のことでした。

？「ぐおおおお！」

なのは「え！」

私は夢で聞いた声に誰かが助けを求めている、私はあのフェレット君が声の主だと。そして私が診療所に付くと、そこには黒い塊がフェレット君を襲っていた。

フェレット「僕の持っている力を、魔法の力を！」

なのは「ま…魔法？」

そして私はフェレット君が赤い宝石を渡れる、そして。

なのは&フェレット「不屈の心はこの胸に！」

私は

なのは「フェレット」「レイジングハートSet Up!」

【StandbyReadySet Up】

私は魔法少女になりました。

そして

？「ぐおおおお！」

なのは「剣を持ったからには、もう後には引けないの！」

私は武器を取りこの黒い塊と対峙した、魔法少女リリカルなのは好きに生きる者始まります。

【通り】

黒「ぐおおおお！」

なのは「来る！」

黒い塊はなのはに突進してきた。

なのは「突進しかできないの？」

なのはは自前の運動神経で避ける

フェレット「油断しないで！」

なのは「え？」

【ドガ！】

なのは「きゃああああ！」

黒い塊に後ろから突進されなのはは壁に激突した……っが。

なのは「いたた……あれ？キズ一つ無い」

フェレット「それは防護服のおかげだよ」

なのは「思っていたより丈夫なんだね」

黒「ぐおおおお！」

フェレット「こっちも攻撃しないと！」

なのは「うん……そうだ、お兄ちゃんから教わったあの技を使っとき」

フェレット「技？」

【回想】

恭也「なのはは上達が早い、本当は普通の女の子でいて欲しかった

んだが、なのはが決めたことに俺が言う言葉は無い、だが剣の道に足を踏み入れた以上覚悟してもらおう。

なのは「うん」

恭也「この4年間なのはは頑張った、そこで技を一つを教えよう。

なのは「技？」

恭也「そうだ、そしてその技の名は」

【回想終了】

なのは「その技は！」

黒「ぐおおおおお！」

黒い塊は再びなのはに突進してきた、そしてなのは足に力を入れ腰を踏ん張り黒い塊に向かって駆け出す」

なのは「やあああああ！」

なのはと黒い塊は交差した……そして

黒「ぐおおおお……！」

【ドシンー！】

黒い塊は倒れた

なのは「魔法剣エーテル卓袱台返し……こんな技本当にあるのかな？」

フェレット「ま…まあ、とりあえずありがとう」

なのは「いいんだよ、私は無我夢中だったし」

フェレット「でも……危ない！」

なのは「え？」

黒「ぐおおおおお！！！」

倒したと思った黒い塊はなのはに突進してきた

なのは「やば」

なのはも倒したと思い構えを説いてしまったため油断をしてしまった。

？「させない！」

【まもる】

フェレット「君は！」

なのは「ヒカリちゃん！」

突如ヒカリがなのはの前に現れてなのはを守った。

ヒカリ「これ以上好きにさせません」

なのは「えーと、ヒカリちゃんもしかしてその力はあるのときの？」

ヒカリ「これはあのときと違いますよ、これはただの技にすぎません……それになのはちゃんこそ」

なのは「こ……これはね海より深い事情が……」

ヒカリ「まあ、それより」

？「なのはー！」

？「なのはちゃん！」

？「なのはー！」

ヒカリ「アリサちゃん達じゃないですか」

アリサとすずかとフェイトは光柱を見てここに来たということをせつめいした、そしてヒカリもなのはも事の事情を説明した。

なのは「というわけなの……それに見られていたなんて」

アリサ「だって、あんな大きい柱が出現したんだもの気がつかないほうがおかしいわよ」

すずか「うん」

フェイト「私はそれだけじゃないんだよね」

なのは「それってどういうことなの？」

フェイト「ヒカリが空を飛んで行くのが見えたから…それで」

ヒカリ「見られていたのですか」

アリサ「とりあえず……なのはとヒカリはそういう力があるのを隠したってわけね。」

そういいながら笑顔のアリサだけど、目が笑っていなかった

なのは「私の場合は今なんだけどね」

ヒカリ「き…嫌われるかもしれないと……」

アリサ「別に嫌いなんてならないわよ、それに私は隠していたってことに怒っているのよ！」

すずか「そうだよ、別に嫌いになんてならないよ」

フェイト「そんな事で私たちの絆は脆い物じゃない」

ヒカリ「ありがとう……それじゃあ思いつきり力を振りますか！」

黒「ぐおおおおお……！」

アリサ「なにあれ！」

黒い塊にアリサとすずかとフェイトは驚く。

ヒカリ「邪魔です！」

【へびにらみ】

ヒカリはへびにらみを使い黒い塊を動きを止める

なのは「なにをしたの？」

ヒカリ「しびれさせただけですよ」

フェレット「チャンスだよ、急いで封印を」

アリサ「しゃべった」

すずか「不思議」

フェレット「それはあとで説明しますから、君は封印を！」

なのは「えーと……どうしたらいいの？」

フェレット「レイジングハートをあいっに向けて言って、ジュエルシールド封印って！」

なのは「わかった！リリカルマジカルジュエルシード封印！」

黒「ぐおおおお！！！」

そして黒い塊は消えた、そこに青く輝く宝石のような石が表れた。

すずか「あれってなんなの？」

アリサ「綺麗」

フェレット「ありがとう、君のおかげで探し物の一つを手に入れたよ」

なのは「これが君の探していたもの？」

フェレット「はい」

フェイト「とりあえず騒ぎは収まったと言っていいんだね」

フェレット「はい、とりあえずは」

【うーうー】

フェレット「この音はなんですか？」

フェレット君を除いた全員は顔を青くした。

なのは「ねえみんな」

アリサ「言わなくてもわかっているわ」

すずか「うん」

フェイト「……あははは」

ヒカリ「……………」

フェレット「……？」

この音の正体は警察がここにやってくるという知らせであつた、たぶんパトカーの音に間違いない、こんな時間に子供が外にいるのだから……っと、言うことでは済まさない、なぜならさっきまでここで戦闘をしていたため周りは穴だらけであつた。

全員「ごめんなさーい！」

全員脱兎のごとくその場から逃げた。

【近くの公園】

なのは「はあ…はあ…はあ、とりあえずここまでくれば」

アリサ「あ…あいかわらず足が早いんだから」

すずか「まだまだ余裕だよ」

ヒカリ「鍛えていますから」

フェイト「とりあえず整理しない？」

フェレット「そうでした、まずは」

フェレット説明中

アリサ「なるほどね、そしてこれがあんたの探していた物というわけね」

フェレット「でもまだ一部ですけど」

すずか「一部？」

フェレット「これはジュエルシートと言って願いを叶える広大な魔力が詰まった石です」

ヒカリ「願いですか？」

フェレット「はい、しかし正常ではなく歪んだ願いになります」

なのは「どういうことなの？」

フェレット「願いが叶っても回りにとんでもない被害が出るんです」

アリサ「それってさっきの黒い塊みたいのが」

フェレット「そうです、でもあれは思念体ですので君のおかげで被害は小さくなりました。しかし残りのジュエルシートはこれを含め

て21個あるんです」

アリサ「そんなにあるの!」

フェレット「でもほとんどが次元の海に落ちましたけど、覚えている範囲はこの世界に7〜8個くらいだと思っんです」

すずか「そんなに……と、言うことは人間が願ったら」

フェレット「今回の何倍の被害が出る可能性があります」

それを聞いた私達はただ黙っているしかなかった。

アリサ「……と言っかなんでそんな危ないものをあんたは私たちの世界にと共にやってきたわけ?」

フェレット「それはですね」

フェレット君は語る

フェレット「僕はジュエルシードをある場所に運んで輸送している最中でした、そして突然何者かの攻撃のせいでジュエルシードはこの世界に」

フェイト「そんなことが」

ヒカル「……そのせいでこの世界にこれが」

フェレット「はい、すみません君達を巻き込んでしまって」

アリサ「仕方が無いわよ、突然だったんじゃない」

すずか「あなたのせいじゃないよ」

ヒカリ「そうですよ、そうと聞いたからには」

フェレット「？」

アリサ「そうね、私たちがそのジュエルシートって言う物を集めるのに協力するわ」

フェレット「え？」

すずか「そうだよ、この子が困っているんだもん探そう」

フェレット「えーと」

フェイト「そうしよう」

ヒカリ「私も参加します」

なのは「私も最初から手伝う気だったもん、みんなでやろう」

全員決意が固まった

フェレット「でも、見つけてもすぐに僕と……えーと」

なのは「そういえば、名前を言ってなかったね。私は高町なのは」

アリサ「アリサバニングよ」

すずか「私は月村すずかです」

フェイト「フェイト・テストロッサです」

ヒカリ「古明地ヒカリです」

フェレット「僕はユーノ・スクライアです、じゃあ見つけても僕となのはに連絡をして欲しい。封印作業はなのはじゃないとできないんだ」

アリサ「わかったわ」

ユーノ「それと君達全員は魔法の資質があります」

すずか「本当なの!」

ユーノ「はい、特にフェイトがなのはと同じくらいに感じます」

フェイト「本当なの」

ユーノ「間違いありません」

フェイト「へえ」

ヒカリ「とりあえず一旦解散して家へ帰りましょう、みんな心配していると思います」

なのは「そうだね、じゃあ帰ろう」

そして私達はこの場で解散して家に帰った。

そして

【霊夢Side 公園上空】

霊夢「なるほど、そういうわけか……」

私は一部始終空から見ていた、ジュエルシードと呼ばれる魔力が詰まった石。そしてこれがこの世界に起きている異変……。

霊夢「とりあえず暇ができたなら手伝ってやるか……それまであいつ達に任せておくのがいいわね」

私は先回りして寮の門の前に向かった。

【ヒカリSide】

フェイト「とりあえず明日学校で話合おう」

ヒカリ「そうですね」

そして私達はいそいで寮に戻った……が。

【古明地寮 門前】

ヒカリ「あ」

さとり「おかえりなさい」

ヒカリとフェイトが寮に付くと門の前に霊夢とさとりが立っていた。

ヒカリ「こ…これはですね!」

さとり「ヒカリ……フェイトちゃん」

霊夢「……お説教だけでいいんじゃないのさとり?」

さとり「…とにかく、事のことは知っています。そしてそれに関し
ては目をつぶります、しかし」

すごい怒っているなと思ったヒカリ。

さとり「無断外出にかんしては目をつぶる訳にはいきません!」

ヒカリ「ごめんなさい!」

フェイト「ひiiiiiii!」

そして

ヒカリ「お尻が……」

フェイト「大丈夫ヒカリ?」

あの後私とフェイトちゃんはママのお説教を喰らったあと、私はお尻を叩かれる始末。そしてママに心配をかけたのは反省しています。さとり「とりあえず、フェイトちゃんは自分の部屋に帰りなさい」

フェイト「はい」

さとり「そしてヒカリはさっさと寝る！」

ヒカリ「はい」

そしてフェイトちゃんは部屋に帰り、私は自分の部屋に戻った。

【ヒカリの部屋】

ヒカリ「散々な目に遭いました」

すぐさま私はベッドに入った

今回私はが思った事、まずはジュエルシードはこの世界にやってきた、そして誰かが輸送船を襲った事。

ヒカリ「いったい誰が……」

アリシアさんが生きているのでPT事件は起こることはありません……もしかしたら。

ヒカリ「転生者？」

私はそう呟いた。

ヒカリ「いずれにしてもまだ情報が少ない、今は様子を見ることにしましょう」

そして私は眠りについた

【翌日】

ヒカリ「……朝ですか」

いつもどおり私はやる事を終えて、支度をしたあと学校へと向かった

【霊夢Side】

霊夢「さて、さっそく行きますか」

私は寮を出て翠屋に向かった

【翠屋】

霊夢「おはようございます」

士郎「待ってたよ」

桃子「今日からよろしくね」

霊夢「はい」

私は店のマニュアルを渡される、お客に接し方と店のルール。そして常に笑顔で客を出迎える。

士郎「とりあえず、回転準備をするから掃除をお願いするよ霊夢ちゃん」

霊夢「わかりました」

そして私の仕事生活が始まった。

【時は流れ】

【学校前 ヒカリSide】

学校が終わり私達は話し合った

アリサ「散々だったわね」

すずか「うん」

なのは「そうだね」

フェイト「さとりさんのお説教長かったよ」

ヒカリ「私はお尻叩きですよ」

アリサ「さとりさん厳しいのね」

やっぱりみんなただではすまなかったらしい

なのは「とりあえずユーノ君は家で預かる事になったから」

アリサ「そう、じゃあ家に帰ったら翠屋に集合よ!」

すずか「わかったよ」

フェイト「うん」

ヒカリ「分かりました」

私たちは家に帰ったあと翠屋に集まった。

【翠屋】

なのは「こっちだよ」

私は翠屋に着くと外テーブルに案内される、そして全員揃ったとき話し合いを始めた

なのは「とりあえずユーノ君から」

ユーノ「……こんな人が多い場所で大丈夫なのかな?」

アリサ「本当ならもつと静かな所にしたかったんだけど」

ユーノ「仕方ない」

すずか「なにをするの？」

ユーノ《これならどうか？》

すずか「え？」

アリサ「頭の中から声が……」

ユーノ《これは念話と言って、心の声を頭に送っているんだ。みんなに教えてあげるよ》

ユーノは念話のやり方をみんなに教えた。

アリサ《コツを掴んだら案外簡単ね》

ユーノ《それはみんなが魔法の資質があるからだよ》

なのは《それじゃあ始めよっか》

そして私たちは表は普通に会話をしながら、念話を使って話し合った。

ヒカリ《まず私はなのはちゃんと一緒に神社あたりを探してみようと思います》

アリサ《私はユーノを見つけた場所を探してみるわ》

すずか《私もアリサちゃんについていく》

フェイト《私はなのはとヒカリに着いていくね》

そして私達は行動を起こした

【同時刻 霊夢Side】

霊夢「ふーん、作戦会議つてわけね」

私は偶々ヒカリ達がいたので盗み聞きしていた。

霊夢「やるわね、念話か……もしかして私魔法の資質があるわけ？」

そんなわけないか、私は仕事に戻った。

【茂み アリサSide】

アリサ「あった？」

すずか「ううん」

私とすずかはユーノを見つけた場所を徹底的さがしている。

アリサ「青く光っているからすぐに見つかるかと思ったんだけどな……」

すずか「そう簡単にはいかないみたいだね」

そして

【神社付近 ヒカリSide】

なのは「見つからないね」

ユーノ「そうだね」

ヒカリ「昨日みたいな気配がしません」

フェイト「何事もなく見つかるといいけど」

私達は神社に向かう中あたりを警戒して探していた。

そのときだった

【ピーン】

なのは「あ！」

ユーノ「ジュエルシードだ、誰かが発動させたんだ」

フェイト「どこなんだろう？」

ヒカリ「なんか神社のほうからいやな気配がします」

ユーノ「……ヒカリの言うとおりだよ、そこにジュエルシードがある！」

なのは「早く行こう！」

私達は急いで神社に向かった。

【神社】

ヒカリ「あれは！」

？「グルルル」

私たちが神社に着くとそこには黒くて大きい化け犬がいた。

なのは「あれってなんなの！」

ユーノ「たぶんジュエルシードが叶えた姿だと思う」

フェイト「はやくなんとかしないと！」

化け犬「ガアアアア！」

なのは「こっちに来たよ！」

ユーノ「なのは、はやくパスワードを。レイジングハートを起動して！」

なのは「あんな長い覚えられないよ！」

ユーノ「もう一回言うから……」

ヒカリ「はやく！」

そのときだった

【Standby Ready】

レイジングハートが光を放った、そして刀へと変わった

ユーノ「パスワードなしで起動させた……」

ヒカリ「間に合わない、よけて!？」

フェイト「なのは!」

【ドーン!】

化け犬はなのはに体当たりを喰らわせた、そして砂煙が舞う。

フェイト「な…なのは!」

ヒカリ「大丈夫です」

なのは「……いたた」

砂煙が晴れると防護服を着たなのはがいた。

なのは「ふう、なんとか大丈夫だね」

ユーノ「なのは!油断しないで」

なのは「うん!」

化け犬「があああああ！」

なのは「おわつと！」

瞬時に攻撃をかわす

なのは「うーん、接近ばっかだと……そうだ。レイジングハートで
きる？」

RH【大丈夫ですマスター】

なのは「お願い」

RH【デイベインシューター】

なのはのまわりに3つの光の球体が出現した

なのは「お願い行つて！」

なのはは光の玉を化け犬に向けて放つ

【ドガン】

化け犬「があああああ！」

化け犬の顔面にあたり怯んだ。

ユーノ「なのは今だ！」

なのは「ジュエルシード封印！」

【Ceiling】

化け犬は消え、子犬の姿になった。そして奥に飼い主らしき女性が
気絶していた、女性が目を覚ます前にこの場を去った。

なのは「とりあえず2個目をゲットしたね」

フェイト「そうだね」

ヒカリ「アリサちゃん達に連絡して今日はおしまいにしましょう」

ユーノ「そのほうがいいよ」

ヒカリは念話でアリサ達に連絡した、そして今日はお終いにして明日探しことになった。

【古明地家 ヒカリの部屋】

ヒカリ「とりあえず、今日は無事に回収しましたし。あとは……あれか」

そう、なのはちゃんが自分の意思で探すというイベントが起こる。

ヒカリ「……回収しましょう」

次のジュエルシードは発動前に回収する、それがよけいなお世話になろうとも。

ヒカリ「なのはちゃんに負担をかけるわけにはいきませんから」

私は決意した原作ブレイクになるうともみんなを守ると、それがあんなことになるのは今の私には知るよしも無かった。

次回予告

なのは「きゃあああ、ジュエルシードが発動しちゃった!」

アリサ「落ち着きなさいなのは!」

すずか「そうだよ!」

フェイト「とりあえずなんとかしないと!」

なのは「はやくしないと街が!」

霊夢「しょうがないわね!」

次回魔法少女リリカルなのは好きに生きるもの 第9話 ミイラ取
りがミイラになるなんてByすずか

ED【Get Wild】

第8話 魔法？魔砲の間違いじゃないの？B Yアリサ（後書き）

ハチミツ「第8話投稿です」

さとり「ストックも残り少ないですね」

ハチミツ「3話書いて1話をずつ投稿している感じになっています」

さとり「そうですか、では次回に会いましょう」

第9話 ミイラ取りがミイラになるなんてB Yすずか（前書き）

パソコン新しくしました

第9話 ミイラ取りがミイラになるなんてB Yすずか

【学校屋上 ヒカリSide】

なのは「リリカルマジカル、ジュエルシード封印!」

【Ceiling】

ユーノ「お疲れなのは」

ヒカリ「ご苦勞様これで5つ目ですね」

なのは「うん」

私達はあれから順調にジュエルシードを集めています、そして今5個目のジュエルシードを回収することに成功しました。

なのは「ヒカリちゃんごめんね付き合ってもらって」

ヒカリ「いいんですよー応事情はママも知っていますし、呼んでくれたらいつでも駆けつけます」

私が笑顔でなのはちゃんの手を握った

なのは「……あ」

ヒカリ「……ん、どうかしましたか?」

なのは「うっんなんでもないの！」

ヒカリ「そうですか」

そして私達はこの場を解散して家に帰った。

【通り　なのはSide】

なのは「うあ〜」

ユーノ「大丈夫なのは？」

私はレイジングハートを引きずりながら歩いていた

なのは「いちおう……大丈夫、でも疲れたの」

【ドサ】

そう言って私は道端で倒れたしまったの。

ユーノ「わああ！なのは大丈夫！」

何時になったら全部集まるんだろう……魔法少女リリカルなのは・
好きに生きるもの始まります。

【高町家　なのはの部屋】

なのは「うん」

ユーノ「なのは起きて朝だよ」

なのは「今日は日曜だからもう少しお寝坊させて……」

もう少し寝ようとするが

ユーノ「なのは起きないとだめだよ……ねえ、なのは」

なのは「うん」

一応私は目を開けた

そしてなのははレイジングハートを手に取り、いままでのなのは達が集めたジュエルシードを取り出して今までのことを思い返した。

ユーノ君と出会って1週間みんなとがんばって集めたジュエルシード、そして私高町なのはも魔法少女として様についたようです……

なのは「はあ」

ユーノ「なのは、今日はゆっくり休んだほうがいいよ」

なのは「……うん、でも」

ユーノ「今日はお休み、みんなに5つも集めるのにがんばってくれたんだから。それに休むことも大事だよ……それに、今日は約束があるんでしょ」

なのは「そうだった」

そして私はベッドから出て着替えた。

【橋の下近くのグラウンド ヒカリSide】

アリサ「なのはこっち！」

なのは「みんなお待ちせ」

ヒカリ「全然待っていませんよ」

すずか「私達も来たばかりだから」

フェイト「うん」

私達はある橋の下にあるグラウンドに集まっていた、そこはなのはちゃんのお父さんの高町士郎さんがコーチ&オーナをしているサッカーチーム翠屋JFCの試合を見に来ていた。なぜここにいるかと言うと昨日アリサちゃんかたまには生き抜きもしないといけない、という事があつてなのはちゃんのお父さんが今日にサッカーの試合をやると聞いて、応援ガールとしてここにいる。

士郎「……さて、応援席も埋まったことですしそろそろ試合を始めますか」

監督「そうですね」

そして

【ピピー！】

笛が鳴り試合が始まった

アリサ「がんばれ〜！」

すずか「がんばって！」

そして試合を見ている中。

ユーノ《これがこの世界のスポーツなんだ》

なのは《うんそうだよ、サッカーっていうの》

ユーノ《へえ〜》

そしてそのあと熱い試合となった。

【ぴピー！】

試合を終える笛がなり2 - 1で土郎さんのチームが勝った、そしてそのあと選手全員翠屋にあつまってご褒美として食事をした。

【翠屋】

ヒカリ「お店の中すごいですね」

フェイト「うん」

私達5人は中が満員なので外のテーブルでお茶していた。

なのは「にやははは」

そして

霊夢「うあゝ、今日は大変だわ」

ヒカリ「あ、霊夢さん」

霊夢「やつほゝヒカリ達」

一応霊夢さんは臨時で翠屋に来ていた、そして霊夢さんの事は私が説明して知っている。

アリサ「休みなのに大変ですね」

霊夢「正社員といはいえ一応私は新人だし」

すずか「それよりも霊夢さんずっと同じ服を着ていませんか？」

霊夢「分かる」

ヒカリ「そういえば家に入ってからはずっと同じ服ですね」

霊夢「貧乏なのよ、今は服より家具をそろえないと」

すずか「だったら家のいらない家具をあげますよ」

霊夢「本当！」

すずか「はい」

霊夢「いよっしゃあ！」

霊夢さんとすずかちゃんはなんか約束をしたみたいですが、そして私はある少年に目を付けています。

ちょうど食べ終わったのか翠屋から少年達が出てきた、そして土郎さんが話をして解散になった。瞬時に私はある少年を見た。

少年「……………」

少年は鞆から青い石を取り出していた

それをヒカリは見逃さなかった。

ヒカリ「……やっぱり持っていましたね」

アリサ「何か言った？」

ヒカリ「いえ、それじゃあ私はこの辺で」

すずか「このあとになにか用事があったの？」

ヒカリ「はい、ママに買い物頼まれました」

アリサ「私と同じね」

すずか「私も同じ」

ヒカリ「奇遇ですね」

フェイト「よかったらヒカリの買い物に付き合っよ」

ヒカリ「いいですよ、別にたいした物でもありませんから」

そして

士郎「おや君達も解散かい？」

ヒカリ「はい、今日はお誘いいただきありがとうございます」

士郎「いいんだよ、よかったら送っていいかな？」

すずか「私は迎えがきますので」

アリサ「同じくです！」

ヒカリ「私は用があるので」

フェイト「私はこのまま帰ります」

士郎「そうか、なのははどうするんだ」

なのは「お家に帰ってのんびりするよ」

士郎「ははは、そうか父さんも一風呂はいってお仕事再開だ、それじゃあ一緒に帰るか？」

なのは「うん」

そして私達は解散した、しかし私はあの少年の後をつけた

【通り】

ヒカリ「さて、どうしたものか」

私は走って少年に追いついた、すると女の子と一緒に歩いていた

ヒカリ「……しょうがない、ベタですが」

私は周囲を確認してある技をつかった

【こうそくいどう】

こうそくいどうを使って私は先回りをする、そしてある路地裏まで行く。

そして

少年「それでね」

ヒカリ「今だ」

私は。

ヒカリ「きゃあああー!」

悲鳴をあげた

少年「え？」

少女「今の悲鳴だね？」

少年「うん、この路地から聞こえたよ」

少女「どうするの？」

少年「僕が見てくるよ」

そして少年は恐る恐る路地の中にはいった

【路地裏】

少年「大丈夫ですか……」

ヒカリ「失礼」

少年「え……？」

【さいみんじゅつ】

少年「……あ」

ヒカリはさいみんじゅつを使い少年を眠らせた

ヒカリ「これでよし」

私は少年の鞆からジュエルシードを取り出した。

ヒカリ「すみませんがこれを頂いていきます……でも変わりに」

ヒカリはひかりのいしを取り出して鞆の中に入れた。

ヒカリ「ジュエルシードよりいいですよ」

私は少年を残してこの場を立ち去った

【古明地家 ヒカリの部屋】

ヒカリ「ふう、無事回収できました」

私は少年からジュエルシードを回収したあといったん家に戻り、なのはちゃんの家に行く準備をしています。

ヒカリ「さっそく封印してもらわないと」

私は家を出てなのはちゃんの家に向かう途中だった

【ピカ】

このときジュエルシードが光ったことに気がついていれば。

【通り】

ヒカリ「何事もないといいのですか……」

私が警戒しているときだった

？《くくくく》

ヒカリ「誰ですか？」

私は不思議な声で足を止めた

？《つれないな、自分を忘れるなんて？》

ヒカリ「なにを！」

？《わからないのか？俺だよ森下恭介だよ！》

ヒカリ「わ…わたしですか！」

恭介？《そうだ、そして俺を殺したお前だけは許せない》

ヒカリ「恭介は私です」

恭介？《ちがうだろ、おまえは古明地ヒカリだろう？》

ヒカリ「恭介でありヒカリで……あれ、私は……」

恭介《わからないだろう？お前が勝手に俺の中に入ってきて俺という恭介の人格を押し込め殺した、そして何時の間にか女らしくなっちゃまう。そして今のお前は恭介としての記憶を持ったヒカリという存在だ、お前は恭介ではない！赤の他人だ……》

ヒカリ「ちがう！私はそんなことをしていない、ただ今の自分は女だからそれらしい行動をしているだけにすぎません。そして私はこ

れからも私でいる古明地ヒカリでありながら恭介の自分を捨ててない、だから消える偽者！」

その瞬間だった

【ピカー！】

ヒカリ「ジュエルシードが……」

恭介？《かかったね》

ヒカリ「なにを」

恭介？《くくくく、俺はこのときを待っていたんだ！》

ヒカリ「なにを！」

恭介？《わからないか？俺はお前の闇の心の部分だ》

ヒカリ「闇の心？」

恭介？《そうだ、そしてジュエルシードの力によって徐々にお前の心の闇に人格ができた……それが俺だよ》

ヒカリ「そ、そんな」

それを聞いて私は愕然とした、自分のせいでこんなことになるなんて

恭介？《そしてジュエルシードはお前の願いを聞き届けた》

ヒカリ「お願い止めて！」

恭介？《くくくく、さあ行こうか幻想郷へ！》

ヒカリ「いやああああああ！！！！！」

そして私の意識は途絶えた……

ジュエルシードはヒカリを飲み込んだ、その場に紅い屋敷が出現した。そして空には大地が広がっていた、巨大な山が出来上がっていた。街に森が出現した、そして神社が出来上がっていた。

【同時刻】

なのは「これは！」

私はジュエルシードの気配を感じてとあるビルの屋上に立っていた。そして私の目に映った光景は街がすごいことになっていた

ユーノ「だぶん人間が発動させたんだ、強い想いを持ったものが願いを込るとジュエルシードは一番強い力を発揮するから……」

なのは「そんな……やっぱりあの子が持っていたんだ」

早く私が動いていたら止められたかもしれない。

【翠屋 霊夢Side】

霊夢「まったくいったいなんなのよ！」

私はいやな予感がして結界を張った、そしてそのあと店の前に無数の木が現れた。なんとか結界を張ったおかげで店は無傷ですんだ。

士郎「いつたいなにか」

霊夢「……士郎さんすみません、私は行きます」

士郎「霊夢ちゃん！」

そして私は店を出て空を飛んだ、さらに私の目に映った光景に驚いた。

霊夢「紅魔館……それだけじゃない、妖怪の山…天界…魔法の森。そして博麗神社……これじゃあまるで幻想郷じゃない！」

いったいどうなっているか私は分からなかった……けど私の勘が告げている。

霊夢「これがジュエルシードの力？」

そうだとすると自分が思っていたより事態が深刻だった、すると。

霊夢「なのは？」

私は建物の屋上にいるのはを見つけて向かった。

【建物屋上】

霊夢「なのは！」

なのは「霊夢さんどうしてここに……それに空を飛んで」

霊夢「今はそんな事はいい、どうなっているのよ!」

ユーノ「僕が説明します!」

フェレット説明中

霊夢「なるほど、そういうことか……」

ユーノ「はい……」

なのは「私がはやくしていれば」

霊夢「暗くならないの!どうすればいいわけ?」

ユーノ「願った人間を見つければ」

霊夢「でもこんなに広いと……そうだ」

なのは「なにかあるの?」

霊夢「力の痕跡をたどれば」

ユーノ「痕跡?」

霊夢「ええ」

私は目を閉じ感覚をときました。

なのは「霊夢さんどうですか？」

霊夢「……あそこね」

なのは「え？」

霊夢がある所に指を差したそこには紅い館が建っている所だった

霊夢「紅魔館あそこか」

なのは「えーと」

霊夢はそう言うとき紅い館のほうへ飛んでいった。

なのは「まってください！」

霊夢のあとを追った。

【紅魔館内　なのはSide】

なのは「全部紅いね」

霊夢「……奥ね」

ユーノ「そうですね」

そして霊夢達は奥に進む、そして

なのは「ひ…ヒカリちゃん」

私が奥に進むとヒカリちゃんがいた、ジュエルシールドを額につけて
まるで人形みたいだった。

なのは「どうしてヒカリちゃん！」

霊夢「どうするの」

なのは「もちろん助けるよ」

ユーノ「なのは、接近して封印を！」

なのは「うん！」

そのときだった

【ツカ！】

なのは「ヒカリちゃん」

突然ヒカリが目を開けて立ち上がった

ヒカリ「……………」

そしてヒカリの背中からコウモリのような羽が生える

霊夢「まるでレミリアね」

ヒカリ「……ようこそ紅魔館へ」

なのは「ヒカリちゃん！」

私は必死にヒカリちゃんに声をかける

ヒカリ「ヒカリって誰？私はこの館の当主レミリア・スカーレットよ」

霊夢「レミリア……これは紅魔郷の再現……まさか」

ヒカリ「あなたは今まで食べたパンの枚数を覚えているかしら」

霊夢「全然会話にならないわね」

まるでテープレコーダーのように録音された言葉を再生しているようだった。

ヒカリ「こんなに月が紅いから楽しい宵をしましょう」

霊夢「来る！避けなさい」

なのは「ふえ？」

そしてレミリアに成りきったヒカリは紅い弾幕を放った

【ドガンー！】

なのは「きゃああああー！」

ユーノ「なのは!」

弾幕はなのはに当たったが無事だった。

なのは「大丈夫だよ、見た目だけでたいしたこと無いよ」

霊夢「本物だったらその程度ですまないわよ」

かなり余裕の霊夢さんに私はたくましいと思った。

ヒカリ「うゝ生意気な!」

霊夢「……おぜうさまモードだったのね……なら簡単に異変を解決できるわ」

なのは「どういうこと?」

霊夢「とりあえず私が動きを封じるからあんたは封印しなさい」

なのは「うん!」

霊夢「霊符 夢想封印!」

霊夢は札を取り出し夢想封印を放った

【ドガン】

ヒカリ「うわーん咲夜!?!」

夢想封印はヒカリにあたり動きを止めた。

ユーノ「なのは今だ!」

なのは「ヒカリちゃん今助けるよ、リリカルマジカルジュエルシード封印!」

【Ceiling】

ヒカリ「……………」

ヒカリの額に張り付いていたジュエルシードは取れ、館は消えて町は元通りになった。

そして

ヒカリ「…………あれ、わたしは…………?」

なのは「ヒカリちゃん!」

ヒカリ「おわ!」

私はヒカリちゃんに抱きついた

なのは「心配したんだよ!」

ヒカリ「心配?…………そうだ、私は!」

少女説明中

なのは「そんなことが」

ヒカリ「……私のせいでこの街のみんなが」

なのは「ヒカリちゃんのせいじゃ」

ヒカリ「自分の心に負けたせいで……こんなことに」

なのは「ヒカリちゃん」

ヒカリ「……ごめんなさい！」

ヒカリは走り出しどこかへ行ってしまった

なのは「ヒカリちゃん！」

私は追いかけてよとするが。

霊夢「そつとしいたほうがいいわ」

なのは「霊夢さん」

霊夢「これはあいつが乗り越えないといけない事よ、だから私達が何を言っても無駄よ」

そう言つて霊夢さんはこの場から去つて行つた。

なのは「……………」

私はヒカリちゃんを守るために強くなろうとしているのに、この様になってしまった。そして私はお手伝いでなく、自分の意思でジュエルシードを集めると決意した。

なのは「はやく立ち直ってヒカリちゃん」

【古明地家 ヒカリの部屋】

ヒカリ「私は……私は！」

自分の心に負けてとんでもない事をしてしまった、いったい人が怪我もしたり死んだ人もいるかもしれない、そしてこんな心持っていた事に気づかなかった自分が許せない。

ヒカリ「ごめんなさい……ごめんなさい！」

そして私はずっと泣き続けた。

【ヒカリの心の中】

恭介? 「ちい、余計な事をしやがって……まあいい次はあるさ」

? 「残念ながらあなたに次はありません」

恭介？「誰だ？ここには俺しかないはずだ」

恭介？が振り向くと金髪の女性がいた

恭介？「お、お前は！」

女性「消える！」

女性からレーザーが放たれる

恭介？「ぎゃあああああああ！！！！」

闇の心の意志は消え去った

女性「……これでよしと、じゃああとはあなた次第よ古明地ヒカリ」

女性は消え去った

【???】

？「例の子の様子は？」

？「はい、心はかなりキズを負っているようです」

？「そうですか……引き続き監視を頼みます」

？「わかりました……藍様」

【ヒカリの部屋】

ヒカリ「……………」

さとり「…………泣きつかれて眠ってしまいましたか」

お燐「さとり様ヒカリちゃんは」

さとり「かなり心に傷を負っています、しかしヒカリ自身の問題で
す私達は手助けすることしかできません」

お燐「ヒカリちゃん……………」

妹が傷ついたのにお燐はなにもできない自分に怒りがわいた

お燐「…………ヒカリちゃんあたしは」

今日起こった事は変えられない、そしてヒカリに試練が待っていた。

次回予告

なのは「ヒカリちゃん誰もヒカリちゃんのせいじゃないよ」

ヒカリ「でも私のせいで街の人たちが」

アリサ「まったく、いつまでも暗い顔をしているんじゃないわよ！」

すずか「気分転換に家に来ない？」

フェイト「そうしよう」

魔法少女リリカルなのは好きに生きるもの第10話 新しい魔法少女の誕生だよByフェイト

第10話 新たな魔法少女の誕生だよBYフェイト

【3年1組　なのはSide】

アリサ「どうだった？」

フェイト「今日もヒカリは休むみたい……」

すずか「でもヒカリちゃんのせいじゃないよ」

なのは「……そうだよ、だけど自分のせいだって思い込んでいる」

あれから3日がたった、私はみんなに3日前に起こったあの出来事を話した。そしてあの日からヒカリちゃんは学校を休むようになった。

アリサ「こうなったら引きずり出すしかないわね」

すずか「アリサちゃん暴力は」

なのは「……そうだよ」

アリサ「多少強引な事も必要だからよ」

フェイト「いいのかな？」

そして私達は学校が終わった後古明地寮に向かった。

【古明地寮】

すずか「おおきいね」

アリサ「あいつ結構お嬢様じゃないの」

なのは「そういえばヒカリちゃんの家に来るの始めてだね」

フェイト「ヒカリの家は1階部分だから行こう」

フェイトちゃんに案内され私達は中に入った。

【ぴんぽーん】

？「はい」

ドアが開き中から出てきたのは

フェイト「こんにちはお隣さん」

お隣「フェイトちゃんじゃないか、どうしたんだいヒカリちゃんの見舞いに？」

フェイト「はい全員で」

お隣「全員？」

なのは「こんにちは」

アリサ「お邪魔します」

すずか「こんにちは」

お燐「おや、お譲ちゃん達じゃないか。さあ中にはいつて」

そして私達はお邪魔した。

【ヒカリの部屋】

ヒカリ「……はあ、今日も学校を休んでしまいました」

私のせいで街が被害にあった、けどニュースをみたら奇跡的怪我人も死人もいなかった。でもどの面さげてみんなに会えばいいのかわからない。

ヒカリ「……はあ」

ため息が出る一方だった

【コンコン】

ヒカリ「誰ですか？」

お燐「あたしだよ」

ヒカリ「お燐姉さんですか」

お燐「行くよ！」

ヒカリ「……はい？」

その瞬間私の部屋のドアが開いた、そして。

アリサ「こら！」

すずか「ヒカリちゃん！」

フェイト「ずる休みは！」

なのは「駄目だよ！」

ヒカリ「み…みんな」

ドアが開くとアリサちゃん達が勢いよく入ってきた

アリサ「さてと、こないからこっちから着たわよ」

ヒカリ「……その」

アリサ「聞いたわよ、別にヒカリのせいじゃないでしょ」

ヒカリ「しかし……奇跡的に犠牲者は出なかったといえは、自分の闇の心のせいだ。」

すずか「ヒカリちゃん……」

アリサ「あーもう！光とか闇とかそんなの関係ないじゃない!？」

フェイト「光は行ってなかったような」

なのは「うん」

アリサ「と、とにかくいつまで不貞腐れるんじゃないの！それに休む時間があるのならもうこんな事にならないように努力するという事をしなさい！」

ヒカリ「努力？」

アリサ「そうよ、反省ならいくらでもできるでしょう？」

ヒカリ「……はい」

すずか「それにどんな事があっても私達はヒカリちゃんの事を嫌いにならない」

フェイト「そうだよ」

なのは「ヒカリちゃんは親友だよ」

ヒカリ「……ありがとう」

あんな事をしたのにみんなは私のことを思ってくれてる、それじゃあ私もみんなの声に答えてもう一度立ち上がろう。

ヒカリ「勝手に休んですみませんでした」

アリサ「それでいいのよ」

すずか「ヒカリちゃん」

なのは「じゃあ明後日から学校に来てくれるね」

ヒカリ「はい」

フェイト「約束だからね」

すずか「そうだ、明日私の家にこない」

アリス「いいじゃない、ちょっとした復帰祝いとついことで」

なのは「そうだね」

ヒカリ「では明日伺います」

アリス「決まりね……さて」

ヒカリ「ん？」

いやな予感がヒカリによぎった

アリス「ヒカリの部屋になにがあるのか拝借しましょう」

なのは「賛成！」

ヒカリ「ちょ…ちょっとみんな」

フェイト「これはなにかな？」

ヒカリ「あーそれは！」

フエイトは引き出しの中からあるノート取り出した。

アリサ「なにそれ！」

すずか「見せて」

ヒカリ「あうあ」

ノートが開かれ中を見られた。

アリサ「なにこれ？」

すずか「何かの絵だよね？」

なのは「尻尾に火が灯っているトカゲかな」

フエイト「これ、前にヒカリが言ってたポケモン？」

アリサ「これが？」

ヒカリ「そうです、それはヒトカゲというんです」

すずか「すごいね」

この世界にポケモンは存在しないだから私の記憶の存在でしかない、だから忘れないようにノートに絵をついつい描いてしまう。

アリサ「こっちは種が背中についている」

すずか「亀が二本足で立ってる」

ヒカリ「もういいですよね？」

アリサ「もっと見るわ！」

ヒカリ「あーうー」

そして今日はアリサちゃん達に部屋を荒らされてしまった。

お隣「よかったねヒカリちゃん」

お隣はヒカリはいい友人に恵まれてよかったと思った。

そして

【夜 テスタロッサ家】

フェイト「よかった、ヒカリが元気を取りもどして」

私はヒカリが元気になってホッとした、同時に思った事がある。それはなのはみたいにデバイスが欲しくなった、そしてデバイスがあればなのはの負担も減るし……

フェイト「そう都合がいい分けがないよね……ん？」

そういえば私はお母さんと約束した事があるのを思い出した。

フェイト「そういえば……開けたらいけない箱があったよね？」

私は過去にお母さんと約束した事があった、それは私が小さいときにある黒い箱を開けようとしたときだった。

【回想】

アリシア「だめでしょう！」

フェイト「ご…ごめんなさい」

アリシア「これはねフェイトが大きくなるまであけたら駄目なの」

フェイト「大きく？」

アリシア「フェイトが大きくなって困ったときに開けていいよ、だからそれまで開けないって約束できる？」

フェイト「うん、できるよ！」

そしてこの黒い箱はお母さんの部屋の棚におかれた。

【回想終了】

フェイト「たしか……これだ」

私は部屋に入り棚を調べると棚に黒い箱があった、そしてそれを手に取った。

フェイト「……まさか」

そして私は箱を開けた

フェイト「これって？」

【Get Set】

私の日常が変わった瞬間だった

【翌日】

お隣「ヒカリちゃんはやく」

ヒカリ「はい、フェイトちゃんもはやく」

フェイト「うん」

次の日になり私はずかずかの家に向かう、でも距離があるのでお隣さんが車を出してくれた、途中でなのはちゃんを迎えに行くルートで行くことに決まった」

お隣「よし乗ったね」

そして私達を乗せた車は発進した

【高町家】

ヒカリちゃん「なのはちゃん！」

なのは「待ってたよ」

恭也「すまない車を出してもらって」

お燐「いいんだよお兄さん」

なのは「失礼します」

そして発進した。

【車内】

ヒカリ「お兄さんは付き添いですか？」

恭也「付き添いと言う月村家に用があつてね」

なのは「お兄ちゃんすずかちゃんのお姉ちゃんと付き合ってるもんね」

恭也「おいおいなのは」

フエイト「そうなんだ」

お燐「若いっていいね」

そして

【月村家】

なのは「着いたよ」

ヒカリ「すずかちゃん家はあいかわらずでかいですね」

比較すると紅魔館ぐらいと言った所

フェイト「古明地寮くらいあるんじゃないかな？」

ヒカリ「そこまで大きくないですよ」

フェイト「謙遜しちゃって」

なのは「にやははは」

恭也「行くぞ」

私達は玄関に向かった

【ピンポーン】

？「はい」

恭也さんがインターホンをならす、そして玄関のドアが開きメイドさんが出迎えてくれた。

？「恭也さん…なのはお嬢様…フェイトお嬢様…ヒカリお嬢様……
お憐いらっしやい」

お燐「あたいがおまけみたいに聞こえるんだけどノエル」

お燐姉さんがノエルと呼んだ人は月村家のメイド長である、そして
お燐姉さんの友人の一人である

ノエル「うふふ、ごめんなさいね」

お燐「うむむむ、まあいいよ」

ヒカリ「相変わらずあの二人は中がよろしいですね」

なのは「にやははは」

ノエル「お嬢様達がお待ちしております」

ノエルさんに案内される

【大部屋】

すずか「みんないらっしやい」

アリサ「主役が遅れるなんてどういう見かしら？」

ヒカリ「あはは、一応オシヤレをしてきたんですよ」

アリサ「へえ」

フェイト「私もすこし」

すずか「フェイトちゃんも」

そして

？「皆さんいらっしやい」

なのは「ファリンさんこんにちは」

ヒカリ「こんにちは」

この人はファリンさん、すずかちゃんの専属メイドであり。ドジな所もある。

？「恭也いらっしやい」

恭也「ああ」

そして恭也さんを出迎えたのはすずかちゃんのお姉さんで月村忍さん、恭也さんと恋人らしい。

ヒカリ「熱いですね」

ノエル「お茶をご用意いたしましょう……なにがよろしいですか？」

ノエルさんにそう聞かれ私は。

ヒカリ「私はお任せで」

なのは「私もお任せします」

フェイト「私もかな」

恭也「まかせるよ」

ノエル「それではすぐにお持ちします、ファリン」

ファリン「はいお姉様」

忍「それじゃあ私は恭也と部屋にいるわ」

ノエル「分かりましたそちらにお持ちします」

ノエルとファリンは頭を下げ退出した。

そして私となのはちゃんとフェイトちゃんは椅子に座りテーブルについた。

アリサ「あいわずなのはのお兄ちゃんとすずかのお姉ちゃんはラブだよね」

すずか「うふふ、うん…お姉ちゃん恭也さんと出会ってからずっと幸せだよ」

なのは「家のお兄ちゃんはどうかな……でも昔と比べて優しくなっ
たかな」

アリサ「へえ……」

ユーノ「よいしょっと、アリサ、すずかこんにちは」

なのはのリュックからユーノが出てきた

すずか「ユーノ君こんにちは」

アリサ「あんた気をつけたほうがいいかもよ」

ユーノ「なんでだい？」

アリサ「それは秘密よ」

そして全員揃った。

アリサ「そういえばジュエルシードは何個集まったの？」

なのは「一応6個は集まったよ」

すずか「まだ6個ぐらいか……先は遠いね」

なのは「うん」

フェイト「みんな今日はヒカリの復帰祝いだし、ジュエルシードの話は後日にしようよ」

アリサ「そうだったわね」

ヒカリ「この間の事はみんなに心配をかけてごめんなさい、もう先走った行動はしないと約束します。

私はみんなに頭を下げた。

アリサ「頭を下げないの！もう終わった事よ」

すずか「うん」

ユーノ「それじゃあ……ん？」

そのときユーノを狙う視線があった、そしてユーノが振り向くとそこには

猫「にゃーん」

ユーノ「え？」

猫「によおーん！」

ユーノ「うわあああああ……！」

なのは「え、ユーノ君？」

ユーノは猫に追いかけられた

ユーノ「アリサが言っていたのはこれかああああ……！」

ヒカリ「そういえばすずかちゃんの家は猫屋敷でもありました……」

なのは「もうアリサちゃん、意地悪したらだめだよ」

アリサ「いしし、ちょっとからかってみたかったから」

すずか「アインだめだよ！」

そこへ

ファリン「はい、いちごみるくティーとクリームクッキーお待ちせしました……え？」

ユーノ「キュキュッ！」

猫「にゃああああん」

ファリン「はわわわ！」

ユーノと猫はファリンの足元でぐるぐるまわった、そしてファリンはつまずき持っていたお茶とお菓子を。

すずか「ファリンあぶない！」

なのは「うわわわ！」

【こうそくいどう】

ヒカリ「セーフ」

瞬時にヒカリがこうそくいどうを使ってファリンが持っていたお盆を回収してなんとかセーフにもちこんだ

ファリン「……っは、皆さんごめんなさい！」

そして

ヒカリ「とりあえず惨事にならなくてよかったです」

すずか「ありがとうヒカリちゃん」

アリサ「あんたの力は便利ね」

ヒカリ「そんな事はないですよ、最初は制御するのに手間取りましたし」

なのは「それでもすごいよ」

フェイト「そうだよ」

ヒカリ「……そんな事を言われたら、照れてしまいます」

そして私はみんなと楽しくお茶会を楽しんだ。

ユーノ「逃げ切ったぞ!」

そしてユーノは猫から逃げ切った。

【同時刻 庭】

猫「ニャーン」

【ピカ!】

猫「にゃ?」

新たなジュエルシードは発動した

【ヒカリSide】

【ドクン】

なのは「あ！」

すずか「どうしたのなのはちゃん？」

アリサ「もしかしてジュエルシード？」

なのは「うん！」

ヒカリ「それじゃあ行きましょう」

フェイト「私も行く」

すずか「私も」

アリサ「私も行くわ！」

ユーノ「危険だよ、アリサとすずかとフェイトはここにいて」

アリサ「うゝでも」

すずか「仕方ないよ、私とアリサちゃんとフェイトちゃんは魔法を使えないから」

フェイト「私は大丈夫だよ、これを見て」

フェイトはポケットから何かを取り出した、それは金色でバッジみたいなものだった。

ユーノ「それはデバイスだよ！」

アリサ「まじで！」

ユーノ「うん間違いない、でもこれをどこで？」

フェイト「お母さんの部屋で見つけたんだ」

【Get Set】

アリサ「喋った」

すずか「レイジングハートと同じなのかな？」

フェイト「とにかく、私もなのはと一緒に戦う」

なのは「……わかった、二人ならあつという間だね」

フェイト「うん」

ヒカリ「それじゃあ行きましょう」

なのは「うん、ジュエルシードはすすかちゃん家の庭だよ」

ヒカリ「わかりました、では行きましょう」

すずか「気をつけてね」

私となのはちゃんとフェイトちゃんは庭に向かった

【庭】

なのは「……あれって」

フェイト「たぶんそうだよ」

ユーノ「また」

ヒカリ「あははは」

庭に入って私達が見たものは、ジュエルシードの力で大きくなった。

猫「にゃーん！」

猫がいた。

なのは「ほえ……あれってなんなの？」

ユーノ「だぶん正常に願いが叶ったんじゃないのかな、大きくなり
たいって……？」

フェイト「そうなのかな」

なのは「とりあえず封印しないと」

ユーノ「そうだね」

そのときだった

【どーん】

なのは「え？」

突然紫色の光が猫に当たった、そして猫は倒れた。

ヒカリ「これはいいたい」

？「あちゃゝ足止めのつもりが当てちゃった……どうしよう」

ヒカリ「あなたは」

空から一人の少女が降りてきた、背中に鳥のような白い羽が生えて頭に輪が付いていて。髪はピンク色そして顔はなんと。

ヒカリ「まどか？」

ヒカリは少女の顔をみてまどかと言った、なぜなら顔がまどかマジカのまどかそっくりだったからである。

？「なんで私の名前を知っているの……もしかして転生者なの？」

やっぱりこの子は私と同じ転生者に間違いない

ヒカリ「……あなたはなにが目的でここに？」

まどか「えーと、私ねジュエルシードが必要でもないの。ただこれをどこか安全な所に捨てようとしているんだ」

ユーノ「捨てるって、それは封印しないといけなんだ」

まどか「……それでいいの？」

なのは「うん」

まどか「……じゃあいままで集めたジュエルシードは……」

フェイト「あなた持っているの？」

まどか「うん……なんだ封印だけでいいんだ、あははは」

ユーノ「じゃあ渡して欲しいんだけど」

まどか「いいよー!」

まどかは10個のジュエルシードを取り出しなのは達に渡した。

なのは「こんなに……大変だね」

【以下省略】

なのは「疲れた……」

？「疲れているところ悪いが、それをいただこう」

フエイト「今度は何！」

ヒカリ「誰？」

今度は白い髪の方が現れた。

ヒカリ「……転生者？」

男「転生者……？なんのことが知らないがそのジュエルシードを渡してもらおう」

転生者ではなかったようだ、しかしジュエルシードを渡せと言っている限りこの人は味方でない。そして私は敵と判断して男を警戒した。

なのは「これは渡せません、私はあなたが悪い人だと思ったから」

フエイト「私も同じだよ」

ヒカリ「ということでお帰りください」

男「……このまま戦ってもいいのだが管理局にばれるとやっかいだな……しかたがない、すこし相手をしてやろう実力を見せ付けるにはいい」

男は戦闘体勢にはいりなのはに向かってきた。

なのは「来る！」

男「遅い！」

なのは「っ！」

男はなのはに光弾を放った、なのはは防御する。

【ドガン】

なのは「まだまだ！」

男「ほう、ではこれでどうだ。サンダーホイール！」

なのは「レイジングハート！」

【RoundShield】

【ドガン】

男の攻撃で煙が発生した二人は煙にまぎれて見せなくなった。

ヒカリ「どこに」

まどか「あそこだよ」

ヒカリ「え？」

フェイト「なのは！」

煙が晴れるとそこには倒れているなのはと立っている男がいた。

フェイト「なのは!」

ヒカリ「なのはちゃん!」

ユーノ「なのは!」

まどか「男の勝ちだね」

男「伊達に大魔導師と呼ばれていない、さてとこれで実力は分かっただろうまだ本気ではないぞ……さあジュエルシードを渡してもらおう」

ヒカリ「そろそろ私も本気で戦う時が来たようですね」

まどか「私とあなたなら簡単に倒せるけど」

フェイト「……許さない」

ヒカリ「フェイトちゃん?」

フェイトちゃんがすごく怒っていた、友達を倒されて怒らない者などいない。

フェイト「あなたを許さない!」

男「ほう、許さなければどうだと言っただい?」

フェイト「バルディッシュ!」

ユーノ「それを起動させるのか」

フェイト「バルディッシュ Up!」

【Get Set】

フェイトは持っていたデバイスを起動させた、そして金色のバッジだったものは姿を変えた。そして黒い斧のような姿に変わった。

ユノ「成功だ、フェイト防護服を」

フェイト「うん」

フェイトはイメージした動きやすい防護服を。

フェイト「決まったよ!」

【Barrier Jacket】

フェイトの着ていた服はパージされ、防護服が展開した。黒いレオタードに皮ベルトみたいな物、そしてフリルのスカートと黒いマント。

ヒカリ「……フェイトちゃん」

まどか「へえ、リアルで見るとすごいね」

男「ほう」

フェイト「行くよ、バルディッシュ」

【イエッサー】

ヒカリ「私も行きます！」

私とフェイトちゃんは男に攻撃をしたける、まずは私が。

【かみなりパンチ】

私のかみなりパンチを使い、男に攻撃した。

男「ふ、遅いな」

【こうそいいどう】

男「なに！」

【ドガ】

男「ぐは！」

私の攻撃は男にあたりまずは一発当てた。

【Sir】

フェイト「うん、どうすれば？」

ユーノ「まずはこの子がどんな魔法がプログラムされているか見る

んだ、そしてそれを撃つ」

フェイト「……わかった、バルディッシュできる？」

【プラズマランサー】

フェイト「うん、これでやってみる」

フェイトはバルディッシュに搭載されている魔法を使う、そしてまさに槍の形をした物が出現した。

ユーノ「それじゃあフェイト、よくねらって撃つんだ」

フェイト「やってみるよユーノ……そこだ！」

男「っ！」

ヒカリ「今です！」

【はかいこうせん】

ヒカリのはかいこうせんとフェイトの魔法で挟み撃ちにした

【ドガン！】

一瞬のすきが命取りと言った所だが、男はまだ動いていた。

男「…っ！ まさか…ここまでやるとは、くくくまあいい今回はこれで引こう。だが次はないと思え！」

男は捨て台詞を残し去っていった。

フェイト「…やった」

ユーノ「あの攻撃を受けてもまだ動けるなんて、それにまだ本気じゃないと言っていたし。それにこの先あいつと戦う事になる、警戒しないといけないね」

ヒカリ「そうですねユーノ君……それじゃあなのはちゃんを運びましょう」

まどか「それでは私はこの辺で」

ユーノ「待つて欲しい、君はいつたい？」

まどか「私はまどか・K・ホワイトロックだよ、じゃあ母さんが心配するからこれで失礼します」

まどか羽を広げ空を飛び去って行った。

ヒカリ「まどか……それよりなのはちゃんを運ばないと」

私達はなのはちゃんを運び屋敷へと戻った。

【月村家すずかの部屋　なのはSide】

なのは「うーん……ここは」

すずか「気がついたなのはちゃん」

なのは「たしか私は……そうだあの人はそれとジュエルシードは！」

アリサ「大丈夫なのは、ジュエルシードは取られていないしその男の人はフェイトとヒカリが追い返したわよ」

なのは「そうなんだ」

アリサ「あと、恭也さん達が私達がやっていたことがばれたわ」

なのは「えー！」

すずか「今ヒカリちゃんとフェイトちゃんとユーノ君が今説明しているよ」

なのは「……大丈夫かな？」

アリサ「……たぶん」

すずか「あははは」

【客間 ヒカリSide】

ユーノ「……本当に申し訳ありませんでした！」

恭也「………」

ヒカリ「……ユーノ君」

なのはちゃんを運んだ後私達は恭也さんと忍さんに私達がなにをやっているかを問いだされた、しかし恭也さん達はこの事を知ってい

たらしくあえて止めなかったという。そしてユーノ君が本気で謝っている、知っていてもなのはちゃんを巻き込んだ上に傷つけてしまったと。

恭也「頭を上げてくれ、別に怒っていない」

ユーノ「しかし」

恭也「なのはも覚悟があって君の手伝いをしている、あいつも剣を持つ者だ。いつか死ぬこともあるだろう、そして俺達は見えてみぬふりをして君達子供に任せている大人が悪いんだ。ユーノ君が負い目を感じる事はない」

ユーノ「……」

忍「士郎さんの言いつけを破るけど今日から私と恭也は支援するわよ」

恭也「そうだな、父さんには俺から言っておくよ」

ヒカリ「さすが戦闘民族高町家ですね」

フェイト「なのはのお父さんっていったい？」

そしてそのあと私達は話し合いジュエルシールドや魔法のこと、さらにあの男について。しかし今の所情報がないため男に関しては恭也さんが調べてくれるらしい、そしてデバイスに関しては忍さんが受け持つ事になった、バルディッシュとレイジングハートが解体されかける事件が発生してすずちゃんがか切れて大惨事なったり大変でした。

そして

ヒカリ「それじゃあ私達は帰ります」

忍「またきてね」

恭也「ああ」

なのは「あははは」

フェイト「大丈夫バルディッシュ？」

【い…イエッサー】

【ま…マイマスター】

お燐「それじゃあ行くよ」

アリサ「また明日ね」

私達は家に帰った………というからお燐姉さんいまままでどこにいたんだろっ。

【古明地家 ヒカリの部屋】

ヒカリ「とりあえず今日の出来事をまとめましょう」

まずはまどか・K・ホワイトロックという少女、敵ではなさそうですけれど一応転生者らしいですから警戒はしておきましょう。戦わずにすむのなら友達になりたい。

ヒカリ「そして現れた謎の男」

転生者ではないがなにか悪意を感じました……もしかしてPT事件が発生しないかわりにあの男がラスボスの可能性があります、そしてジュエルシードを欲しがっていました。何らかの理由で……まさかアルハザードだったりして。

ヒカリ「とりあえずこんなところですか」

そしてフェイトちゃんの覚醒。

ヒカリ「まさかああ言う形でバルディッシュと出会った……アルフはどうなるんでしょうか？」

原作どおりの露出度が高い防護服でしたが、なぜかどきどきはしなかった。女性化がすすんでいる証拠なのかとりあえず女の子にはどきどきしなくなった……全員が百合でないことを祈るしかない。

次回予告

すずか「いつきに16個集まった祝いで温泉に行こう」

アリサ「いいわね、どこにする？」

なのは「温泉がいいね」

フェイト「私も行くよ」

ヒカリ「それじゃあみんなで行きましょうー!」

まどか「おや、あの時以来ですね」

？「お姉ちゃんなの？」

？「さとり様！お久しぶりです」

？「姉ちゃんあたい熱いのはだめだよ」

？「あう×××ちゃんだめだよ」

魔法少女リリカルなのは好きに生きる者 第11話 温泉もいいね
たまにはいいねBy忍

【ED】君の姿は僕に似ている

第10話 新たな魔法少女の誕生だよB Yフェイト（後書き）

さとり「とりあえず10話ですね」

ハチミツ「はい、新しいパソコンにまだ慣れないもので遅れてすみません」

さとり「とりあえず出るキャラが増えていきますね」

ハチミツ「とりえずレギュラーキャラから先に出す計画ですので」

さとり「そうですか、それでは次回で会いましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4060w/>

魔法少女リリカルなのは 好きに生きる者

2011年10月23日15時10分発行